

かたむかひ
古今
全

本問文庫

文庫 14

D 29

60

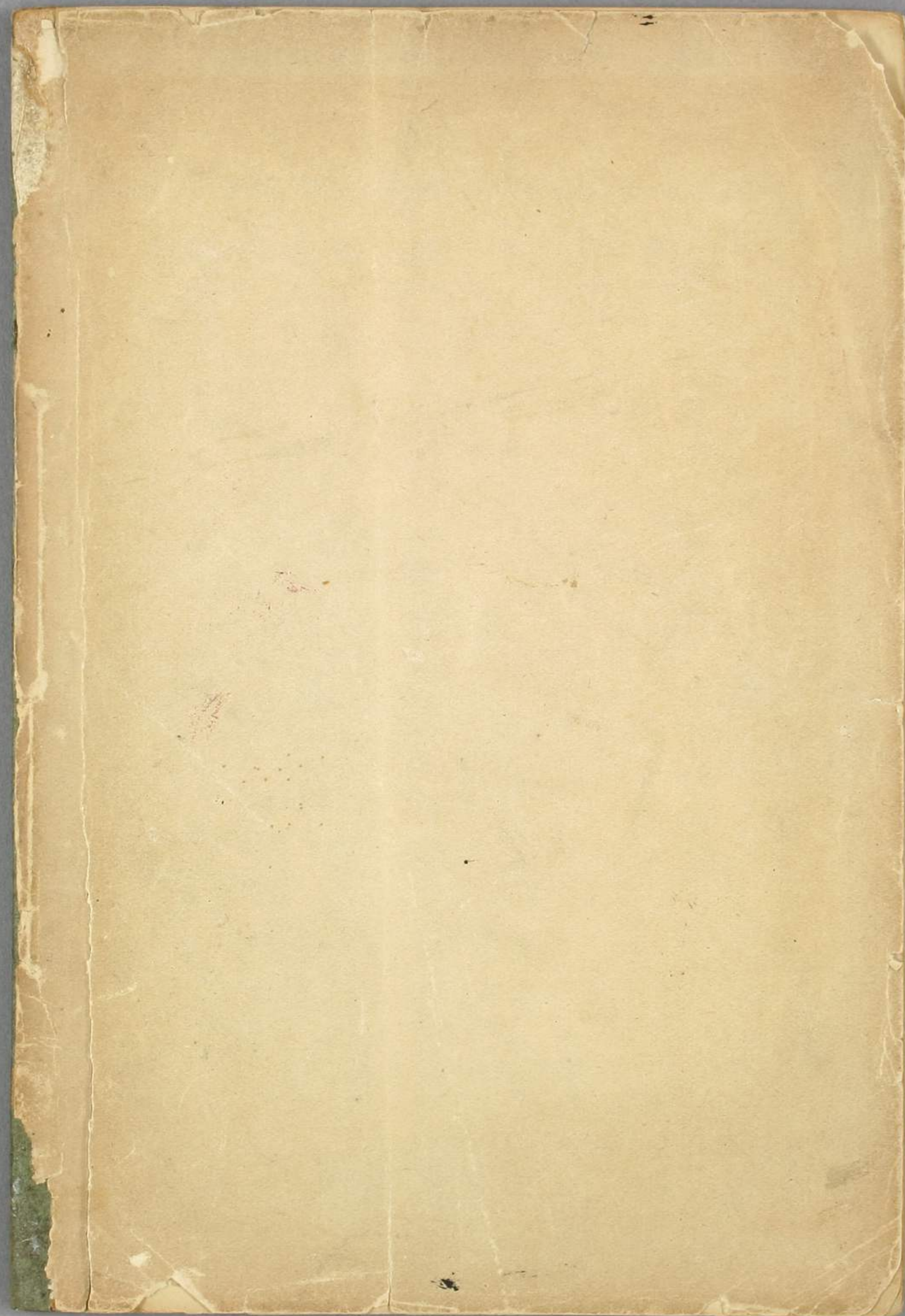
65

70

75

80





元平14
D29



像其面文魯坦在假茲

元平14
D29



像片語文魯坦在假故

假名反古叙

物の本を編みて潤筆料を得るを始めたる者ハ山東京傳なり、然レバ此人を小説
 家中興の祖とし馬琴、種彦、一九、三馬、京山、春水、那といふ有名の著者輩出し、當時小説
 の盛んなる、讀本、合卷、粹書に論なく、年々梓に上るもの牛に汗し棟に充てり、故に此
 人々を大先輩とし、第二の先輩者たる者ハ、柳下亭和貞、二代目利彦(仙果)松亭金水、樂
 亭西馬、一筆庵英泉、美圖垣笑顔、万亭應賀等なり、此第二先輩者の當時に有てハ其盛
 んなる前日の如くならざりしなり、此人々すら世を去りてより、稗史小説の跡を斷
 たんとせし時、僅に踏止まりて小説家たるの統脈を繼續せしものを誰歟、いふに、
 予ハ假名垣魯文翁なりと言はんとす、蓋し染崎春水、瓜生金鷲等の入なきに非ざり
 しかど、恰も世塵を避たる者に等しく、其名を知るも其人を知らず、若くハ當時に有
 て其名を普くハせざりし、獨り交際社會に敏腕の名を知られたるハ翁なり、然レバ
 明治の盛世に至り、文運の隆昌と共に、京傳馬琴も歩を譲るべき大家陸續として顯
 はれ、出版種類の多かる昔日の比にあらねど、中頃絶えせし歲月を維持せし
 ハ翁の功なり、予が翁と知れると四十年、一年時宗の檀家の依頼を受けて、藤澤山へ

14
229

赴きたる事あり、其時遊行上人の面前に於て、翁ハ鈍阿彌子の興阿彌の號を授與せられし事ありて、佛縁の因さへ淺からざりし、然るも翁ハ手に先だちて入るべき道に入られたるを惜み、衰にやまと新聞の紙上を借りて、翁の逸事を記せしを據るとし、翁と筆硯を俱にせし人々が、見もし聞もせし翁の傳記を、藻鹽草かき集めて此一冊といなしぬ、予ハ明日を期して之に端書せよと乞はれ、趣向を練るの暇さへあらねど、前に述たる因もあれバありし次第を述べて序とせり

一月十六日冥府の釜の蓋の明け方
眼覺むる儘に硯の氷を筆に解きて

採菊散人記

1901. 號
傳史門部
別數册
摘要

假名反古

伊井文庫

詳傳

假名垣魯文翁ハ本姓野崎氏、幼名を兼吉と云ひ後ち庫七、又文藏と改め王政維新の際假名垣魯文を以て通稱とす、其祖先ハ相模國高坐郡萩園村に住し世々農を以て業とす、魯文翁の祖父藤助の代に至り故ありて本家より別れ東海國道の傍ら引地村に一家を構へ鎌鍛冶を職とす、男佐吉家督を繼ぎ父藤助、妻某を携へて文政初年江戸に來り京橋鎗屋町に住せしが藤助歿して後ち屢々火災に罹りて家漸く衰へ、初め佐吉ハ魚屋を開業し店に小魚を並べて之を商ひ自分ハ半臺を擔ぎて得意先を賣り廻りしが後にハ窮して同町の裏屋に潛み所謂棒手振の魚屋となり辛うじて其日を送りしと云ふ、文政十二年正月六日夫婦の間に男兒を擧ぐ即ち後の假名垣魯文翁なり

父佐吉ハ少き頃より風流の心掛けあり相州に在りし時村内の若者を集めて俳

野崎左文 編纂
若菜貞爾 校閱



諧發句の筈を開き自ら星窓梶葉と號して集句を選びなせし事あり、其の自咏の句にも「野分」案山子もへうと放ちけり「鬼灯の目にも涙や魂祭り」川瀬の水音したり冬の月等の感吟多かりしと云ふ又學ばずして山水或は人物を畫くに筆意固より書法にの適はざりしも素人繪として往々見るべきものありしとぞ、魯文翁も亦書を學びし事なかりしが後年戲作者となりて草雙紙等の下書を附くるに拙い拙ながら人物の態度稍や整ひ其間自から意匠の凡ならざるものありき是れ或は父の遺傳にあらざる乎

後年文壇の一奇人として世に持て囃されし魯文翁も産れて後ち五六年の間亦通常の赤ん坊のみ通常の子供のみ、天保七年即ち魯文八歳の時父佐吉の館屋町より具足町へ轉居せしが此年天下大飢饉さらぬだに困窮なりし魯文の家は是が爲め益々窮して三度の食事さへ一度の缺くることもありし程なり、魯文空腹に堪へざる時の竊かに四文錢一個を携へ行き今の太刀伊勢屋の前に出でし家臺店にてカラ餅餅の腹に豆腐の殻を買食す、一日父佐吉之を見て大に怒り縱令三度の食は足らずとも人間の子たるものが兎の餌を以て腹を肥やすは我家の恥なり若し此後ち

買食ひを思ひ止まらざれば直ちに我家を放逐せんのみと、魯文の子供心にも此説一理ありとし終に復た餅屋を顧みざりしと、是年魯文の父に就て實語教、童子教を學び又草紙に向ひて初めているはの手習を爲し僅かに四十七字を習ひ得たる時山東京山作の「娘評判記」一冊を貰ひて讀むと數回、初は毫も其意味を解せざりしが讀んで十回二十回に至りて漸く本文の大意を會得し母に向つて自ら其講釋を爲せりと云ふ、同年妹かよ産るされと魯文翁の傳記に必要な關係なれば委しくは記さず

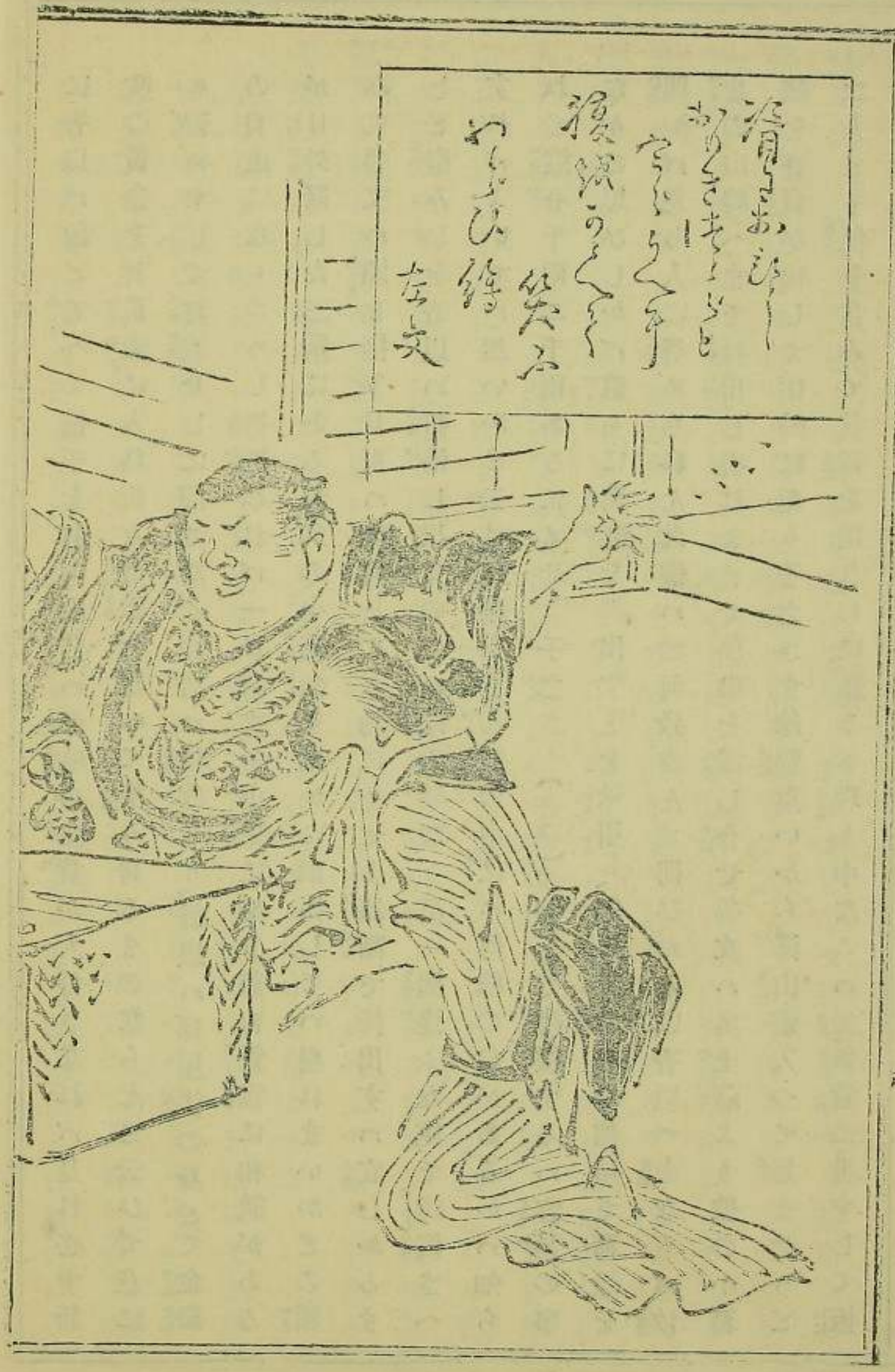
天保八年の春魯文の新橋竹川町の諸藩用達鳥羽屋多吉方に十年の年期にて丁稚奉公に住込み此年都路往來を半ばまで學びたれと後見す又毎夜店を鎖せし後の机に向ひて手習ひを爲したれと是すら拙々しくの上達せず唯其頃より最も好みて手を放さざりし京傳、三馬、一九等の戲作本にて毎年正月七月の敷入にも他の丁稚子僧のごとく紙鳶、獨樂の遊びに耽らずして貫ひ溜めし小遣錢にて膝栗毛の初編二編と春秋の出版にの缺かさず之を暇あることに通讀するをこよなき樂みなせり、此鳥羽屋といふの姓を三村と呼び本家の世に十人衆と呼ばれし

一人にて三十間堀五丁目に住し鳥羽屋清左衛門といふ豪商なり竹川町の鳥羽屋
 中店とも身代豊かにして數人の雇人を使ひ取引先も亦多かりしが斯かる大店の習
 慣として蠟燭の流れ、紙屑等ハ丁稚どもの所得となせしかば雇人ハ之を帆待と稱
 へ其錢を分配せらるゝ時ハ先を争ふて芝居觀物を見物し又ハ買食等に遣ひ捨る
 こと子信どもの常なるに魯文ハ之を以て必ず合巻物を求め毫も買食等にハ徒費
 せざりき去れば鳥羽屋の子信中にハ魯文より年長けたるもありしが番頭手代ハ
 其子信を誡むるにチト兼吉を見習へなど、言ひし事あり、斯くて居ると二三年の
 間に魯文ハ鳥羽屋の子信中にて第一の藏書家となり又第一の博識となれり
 或人の話に當時丁稚中の奇兒と稱せられしもの三人ありて是を新橋の三子
 僧と云へり、其一ハ鳥羽屋の兼吉(魯文)にして自ら鳥羽繪子僧と號し宛字まじり
 に高慢臭き俳諧文を綴り又折に觸れてハ發句などを詠み出るに中にハ誦する
 に足るものあり、其二ハ同町の質舖堺屋の丁稚某にして幼き頃より手跡を能く
 し俳諧の句に妙あり此人後年田川風朗の門に入り笠庵鳥吟と號せり、其三ハ同
 じく堺屋の子信仙之助にして同人も亦董其昌流の書に巧みにして且屢々點取

發句に手柄を顯はせし事あり此仙之助ハ後年緞吳服商となり金屋竺仙と呼び
 て現に淺草新福富町に住せり、銀座役人某深く此の三子僧を愛し自ら髮結錢を
 抛ち三人の前髪を剃落させて古風なる撥鬢奴となし且數月間其髮結錢を貢ぎ
 とし云ふ去れば三子僧ハ才に於て既に奇なるのみならず形に於ても亦此奇あ
 りて往々悪太郎等を凌ぐの權力を有せしとか
 其頃香以山人といふ一時人あり山城町の酒舖津國屋の男にして幼名子之助後ち
 藤次郎と改め大に狹斜の地に豪遊を試み山城河岸の津藤と云へば誰知らぬ者も
 なく其の金錢を湯水のごとく遣ひ捨るを見て世の人紳名して今紀文と呼べり、父
 藤兵衛ハ天保十二年の頃魯文の主人なる三村多吉(鳥羽屋中店)の姉すみを娶りて
 後妻とせしが香以ハまだ子之助と呼びて部屋住なりし頃より遊廓に立入りて多
 くの負債を生せしかば父藤兵衛大に憤り終に子之助を繼母の里方なる鳥羽屋に
 預けて我家の出入を禁じたりき子之助ハ斯く勘當せられて親類預けとなりしに
 も拘はらず猶は人目を忍びて屢々吉原に遊ぶことあり又當時の文人等に交はり
 て多くの金銀を與ふることありしに戲作者、俳諧師、狂歌師若くハ幫間等の日

毎に鳥羽屋に訪ひ來りて世辭を並べ追従を言ふ者引きも切らず魯文も其取次に
 出で、俳諧師等の顔をも見知り彼等よりも兼吉とんくと呼ばるゝやうになり
 ぬ、是より先魯文の京傳、三馬、一九等の名高きを羨み其の著書を読むにつけて我も
 亦戯作者となりて名を後世に傳へんどの志望を抱き其手初めにどて町内に點取
 發句の催しある毎に出吟して高點を争ひし程なれば今斯く戯作者、俳諧師等の出
 入するを見てまたと得難き好機會なりとし先づ俳諧師涼窓露菫に就て俳句を學
 び又香以の紹介にて三世千種庵諸持元淺草の里長 勝田權左衛門に弟子入して狂歌を詠習ひしも固
 より主人の目を忍び使先の隙を偷みて通學せし事なれば唯心の焦つのみにて其
 蘊奥を極むるに至らず、香以の最初より此事を知りたれば深く魯文の變り者なる
 を愛して時に蔵書の二三を分ち又俳諧の道などを口授する事ありき
 其頃最と可咲しき一話あり鳥羽屋の隠居某といふ者折々土藏の三階に上り新
 しき小葛籠の蓋を開きて餘念なく其中を眺め居りし事ありて誰も之に心附か
 ざりしが或日魯文が土藏の三階へ登りし時隠居のあはて惑ひて葛籠の蓋を蔽
 ひ匆々茲を立去りぬ、魯文の此事を當時同家に執居中なる香以山人に告げたる

に香以の暫く考へて横手を打ち隠居の新吹の金貨が大好きなれば是れ必ず新
 吹の黄金を其葛籠に入れ折々員數を算へて樂み居るものならんと云ひて意に
 も留めずして打過せしに間もなく隠居の物故せり、香以の部屋住の身とて金銀
 の自由にならざりし折柄なれば一日魯文を小影に招き兼吉貴様に相談がある
 が日外話した三階にある叔父の小葛籠を竊かに取出して呉れまいかとの頼
 みに魯文の頭を掻き旦那御存じなき物にもせよ無斷で持出すの宜しかるま
 じと辭みしを香以の打消し叔父の物の物なり萬一間違ふた處で辨償さへ
 すればよいで無いかと云はれ魯文も葛籠の中に何程の金があるか知ら
 ねど縦令千兩二千兩あるにもせよ子之さ(香以)の實家で辨償するの容易の事
 なりと思ひしかば直ちに葛籠を持出すを承引し、併し貴郎のお部屋で葛籠を
 開かば忽ち人に咎められん此儀の如何致さんと問ひたるに香以の夫ならば汐
 止の山崎へまで持出し呉れよとて萬事を謀し合せ魯文の奥土藏より彼の小葛
 籠を脊負ひ出して山崎に至り子之さ餘程重いから澤山這入つて居ませうと
 二人とも笑を含みて其蓋を開きしに重きも理り中なるの金銀貨に非ずして板



おろしの春書が葛籠一杯に秘めありしなり、借の隠居が樂しげに見て居たるに、此春書でありしかと二人とも呆れて顔を見合せ居りしが、魯文取敢ず「昔し〜あつた土佐繪の笑ひ本話しの種に残るをかしさ」と吟さみしかば、香以も「化物が出ることも知らでまよひ出せし重い葛籠の怨の張り扱」と一首のされ歌を咏じ其葛籠の故の如く土藏の三階へ納め置きしとなん

此時より香以の魯文を愛するに益々深く自分が鳥羽屋を忍び出て、足を遊里に運ぶ時に必ず魯文を伴に連れ途中より家に歸りて斯く答ふべしなど、言含めて魯文ひとりを歸す事もあり又或時魯文十四五歳の魯文へ「朝顔や水入竹の水を揚げ」といふ句を詠せしに香以のたいく之を賞して香雨亭應一の號を授けし事あり、是より後ち魯文の米羅坊守一に就て江戸座風の俳句を學び幾程もなく俳道大に上達せり

天保十四年魯文の露蘭、守一、香以等の勸めに由り當時の狂言作者にして傍ら戯作を業とする花笠魯文の門に入りて戯號を和堂珍海と號し初めて一編の戯文を綴りて師の添削を乞ひ又

十五歳の時はじめて戯文を作りて
砂はらに蚯蚓のたくる暑さかな

和堂珍海

の句あり魯文の本姓東條、文京又の李園と號し有名の儒士東條琴臺の兄なり天保年間「役者必讀妙々痴談」といへる書を著はして大に劇場社會を騒がせし事人の知る所なれば茲に贅せず、當時魯文の淺草茅町二丁目に住せり其翌年弘化和堂珍海を改めて英魯文と號し同年「政談青砥碑」と題せし讀切の草雙紙を著せり是れ魯文の戯作が上梓して世に出でたる初めなり

魯文と號せし師の名なる魯介の魯と文京の文とを併せ用ひしものなり又英と名乗りしは花笠といふに因みしものなるべし、其頃尾張町に住して漢書の教授を爲し居りし奥川樂水といふ人魯文の戯號を見、五雜俎の故事を取りて能くも名けしものかなと大に感賞す、時に魯文の年十六いまだ五雜俎を讀まず樂水に就て其故事を問はんも面目なればとて急に五雜俎を借り來りて所謂はじり讀に通讀せしに昔し周の世宋國の女仲子生れて其掌中に魯の一字あり古文に魯の古篆尙此の如し是に依て此女後に魯國惠公の夫人となれり云々の一節

を見出して大に喜び人に我が戲號を告ぐる時に、必らず五雜俎の故事を引證して語りしかば、漢書など、覗きし事もなき當年の戲作者等、竊かに魯文が見聞の廣きに舌を捲きて驚きしと云ふ

嘉永元年魯文の戲號の披露を爲さんとて、主家に隠れて諸方を奔走し、曲亭馬琴其他の戲作者、狂言作者等に祝ひの狂歌俳句等を乞受け之を櫻木に鑲めて、黄表紙めきたる綴本に製し、知巳の人に配らんとせしに、父佐吉、此年重き病に臥したれば、急に山王町吉町の裏屋に移轉し、妹かよ、弟佐太郎をして、病父にかしづかしめ、魯文も鳥羽屋より通ひて、其看護を爲す等、片時の暇を得ず、其内病ひ愈々篤く、終に佐吉、同年九月、黄泉の客となりたれば、其葬式法會等に多くもあらぬ、貯へを遣ひ果して、赤貧洗ふが如く、是が爲め、摺物の版木さへあはや、其儘朽果てんかと思ひしに、翌年友人の助けを得て、僅かに百部ばかりを印刷し、之を知巳の人々に頒布して、漸く素志を全うせり、其摺本の「名聞面赤本」と題し、表紙に「溪齋英泉が鉢かつぎと桃太郎の圖を描き、都て黄表紙の体裁に倣ひしものにて、其本文の左の如し（此摺物中に名を著せし曲亭馬琴、其前年即ち嘉永元年已に物故せしものと知るべし）」

夫子童謡をすてず、班固巷説をとる。夫れから思ひ机に寄り、下手の畫きし人丸ならで、天窓かく山涎よたれくり稗史を戲作の手習ひ初めに、筆架の初登山にのぼり、難波津の梅の花笠大人に寺入して、先づ讀習ふ實語教。人賞めたるが故に、たんと書かずと京傳翁の秀句を思ひ、兼て書抜く故事來歴、神釋無常口説の文句、彼の丸本を六韜三略、たしなき智恵を絞りても、く、り枕の碎くだくによしなく、何でも四女の切抜文作。まだ口嘴も黄表紙の筋と畫組の生捕るども、芝居知らずの野暮鶯詠りも、多き作者ふり、おこがま識者の笑ひとなり、昔々あつた土佐繪の古風を慕ひ、金平本を初めとして、世に流れたる桃太郎、人並に毛が三本たらぬ猿蟹合戦、舌切雀の舌たるも、作意ながらも板元から、お宿やどをこじやと尋ねありて、一番詠へたまひなば、月の兔の手柄てがらけて、夫れこそ枯木に花咲爺いけぢやう。鯛の味噌ずのなまぐさ銅。四方のあかの他人とも爲したまはず、其評判を待兼ね山の郭公、何と童蒙衆合點かど、ひたすら願ふ商ひ口。ことし戲作の仲間入して、古き作者と諸共に、同じく肩を並べんと、大木の切口ふとい根じやふてらこい

嘉永二巳酉春

赤本の口調に倣ひて

英 魯 文

門人魯文なるもの嘗て別號して和堂珍海とよび數種の稗史を編めり

通用のよきこそ人の寶なれ錢といはずに筆を取るべし

春雨に今宵夜と共はなさばや

双六やあがりゝ京の仲間入り

初午や寺ともだちの幼なとし

糺出せと書見せたり花の兄

別入ればいよく深く迷ふかな道ある花の山を尋ねて

説わくる高座の鼻の高みくら耳をつらぬくさみが雷名

繪草紙に花ある梅の作者とゝそのみもさこそ粹な營み

魯文をさなかりし時草雙紙の終りの圖の机にかゝり

し作者の眞似して遊びたりしに今また作者たらんこ

とを望む

砂文字や野良を土筆の筆始め

花笠文京

立亭京樂

星亭京兆

玩玉亭京英

柳川重信

葵岡北溪

一龍亭小文車

梅園主人

星窓梶葉

善惡をかき別けて菊の根分哉

我田へも一鉢入れよ作をどこ

田作や春のはじめの祝ひもの

當春も予と共に同意の作あり

駈ぬけて廻りくらせん花の山

とにいふものゝお前でいなしといふ前句に

世の中へ三日見ぬ間の作者哉

誰筆を空に聲ありいかのばり

紀ノ海音といふ名家もあれば未たのものし

珍らしく海に音ある漁りに魚の趣向のたねのつきまじ

美人をあがなふを手活の花といへども花笠先生の門

人を取立るゝ花の苗を植うるが如し

自から振ある枝を撓めてゝ花のうつはに挿すぞ樂しき

作者といひ役者といへば離ぬれ中なり

夏堂守一

櫻田左交

並木五瓶

藤本斗文

西澤一風軒

河竹新七

鶴屋南北

平亭銀鷄

平亭銀鷄

黄鳥やわけて親しきうめの宿

強者と呼れん迄の夜の目寐ぬ作者も武者の心なるべし

鶯にまづ賞めさせん作り枝もめだつ若木の梅がかな文

廣これる薫りや梅のつくり枝

兩の手に桃とさくらを持そへて花の大枝さけるかた腕

聞ずして道のまるとも共々に筆持そへよ文字を教へ子

ふみ習ふ春よさく者の三番叟

芳しく其名の四方に薫れかしさくといふのも花の阿兄

うちの四角そとをば丸く世の中に通用のよき人の此人

櫻咲く山路をゆかば教へなん登るもはやき花のちか道

おもしろき作の趣向のたね本もいまに筆柄にざる此人

手入してやがて美事に咲せなん作りおぼえし梅の花笠

幾人も欲さよ梅のさくをどと

墨附があるで一村つくりどり

八代目三升

六 朶 園

星屋春兄

涼窓露蘭

一筆庵英泉

松亭金水

万亭應賀

式亭小三馬

十返舎一九

立川馬馬

朝櫻樓國芳

墨川亭雪麿

寶田千町

文亭綾次

玉に疵あるほりもの、灸

赤本の赤さの虚の常なれと面白くこそつかまはしけれ

腕たけの力たのもしさくをどと

種蒔て人の田地もつくりどりうまい趣向の作の出来秋

名を更へて門札まろし梅の庵

月花のわのが手にある作者哉

まだ生て居るかど人に言れても斯こそ長かれ筆の命毛

師と頼む人の教をちからあしふみ見る毎に恩を忘るな

飼たて、羽づくろひする鶯の笠にさるなり梅のはな笠

花笠先生の社中魯文子にまめす

みそ揚て作り上手に成たぐの世に能なれし甘口をよき

僕がつかはさする狂文のはさみ仕事にふる着の趣向を

洗ひ張して戯作者の手前符牒をつけんとして

赤本の桃ならなくにわれの又洗濯もの、名や流すらん

爲永春水

笠亭仙果

五柳亭徳升

縁亭川柳

柳下亭種員

豊介子

爲一百翁

山東京山

香蝶樓豊國

曲亭馬琴

英魯文

魯文の馬琴翁に面會すると二回、京山翁に逢ふと三四回なりしが當時馬琴翁の兩眼已に明を失ひ唯だ音聲を聞きて其人の誰たるやを知るに止まれり、魯文初めて師文京と共に馬琴翁を訪ひし時馬琴の戯作者となるの不必得を懇々魯文に諭せりと云ふ、楮是より後ち魯文の入湯の歸路近傍瀧山町に住せる習字指南佐々木瀧藏に就き謝儀二百文を投じて四書五經を素讀せり戯作者になるに四角な文字も讀めねばならぬと云ふ考へなりしなるべし又花笠魯介に面會したしと思ふ時、主家の留守安兵衛といへる者が茅町の近傍に居を構へしを幸ひ同家を借りて雙方より出會ひ以て師弟談話の席となせしに安兵衛夫婦の魯文の訪ひ來るとに饅飯一碗づゝを馳走せりと云ふ魯文の心ひそかに京傳、三馬の筆の跡を慕ひ我も亦社會の有様を其裏面より寫して人情の粹を穿ち滑稽の中に自から諷諫の意を寓せしものを作らんと心掛けしが夫に我れ先づ身を著述の材料となし花街に遊びて泥水の底をあさり其真情を探るこそ肝要ならぬと思ひ定め茲に遊蕩の端緒を開きて品川驛なる俗に阪の五寸と呼べる妓樓に足を運び又或る時近邊の常磐津、清元の稽古所に這入り金春新道の藝妓の門を訪づれなとして是が爲

め遣練の金を遣ふこと一方ならず果に番頭手代の目にかゝりて異見を加へらるゝも屢なりき是れ魯文が廿一二歳の頃なりとぞ、主人多吉の魯文が戯作三昧に耽ることを疾より知り居たれと深く咎むべきに非ずとて其儘に打捨て置きしに今又遊興に身を持崩すを見て竊かに眉を蹙め斯くて店の取締にもならざればとて一日魯文を膝元に招きて太く此頃の不行跡を責めまだ年期に満たざれば斯くなる上の暇を出すより外なし能く考へよと説諭せり、主人の威し置かば必ず番頭手代を以て詫入るなるべし素より憎からぬ兼吉のことなれば其時人々の謝罪を聞入れて故の如く召使はんとの慈悲心より出でし策略なりしに魯文の既に暇を出されしものと思ひ取りしかば罪を謝せんともせず又心中にて最早や戯作者と成すませし了簡なれば何時までも商家の雇人たらんより筆一本にて浮世を渡るこそ氣樂ならぬと立どころに決心し謹しんで主人に御請して住馴れし鳥羽屋の家を飛出しぬ、楮血氣にまかせて主家を飛出して見たれと其頃父佐吉の既に此世の人にあらす弟佐太郎妹かよの夫々奉公に出だし山王町の家さへ疊みし後の事なれば差當り身を寄すべき處なきに苦しみしが其頃木挽町の

劇場河原崎座が猿若町へ移轉せし跡へ新築したる二三のグレ宿今云ふありしを幸安泊りありしを幸
 ひ松川屋といふ家に泊り込み素麴箱を机とし矢立の筆を染めて草雙紙の草稿を
 作りて見たれと魯文の名未だ世に知られざれば之を書林に持廻りしも誰とて
 買はんといふ人なく素より注文の來べき苦も無ければ大戲作者も此に至て進退
 維れ谷まり僅かに重ねたる衣服を賣りて一日々々と過しけり此グレ宿といふの
 多く無宿者などの立入る處なりしに或夜盜賊詮議の爲めとて岡引目あかし今の探偵の如
 者どや〜と松川屋に闖入し來り此奴胡亂の者なりとて魯文を木挽町の自身番に
 拘引して嚴しく身分を問糺されたり魯文のぬからぬ顔にて我の戲作者なりと答
 へしに猶は信用せず戲作者ならば家もあるべき筈なるにグレ宿に泊り込みしこ
 と合點行かず夫とも何を證據ありやと詰られければ魯文苦しまざれに
 仲間にハ入らぬ縁の林そといまだ萌出しの草本作者
 と書きて示さしに此岡引の中に「面赤本」の配り物を見たる人ありしにやム、花笠
 の門人かと云ひて其儘に放免せられぬ魯文は是に懲り長くグレ宿に居るの面倒
 なりと思ひしかば其夜自身番より直ちに出立して相州萩園村なる本家野崎方に

英 魯 文

赴き身の不幸を語りて世話を頼みしに百姓となりて我家の業を助け呉る、了簡
 ならば何時までも世話すべし又奉公が望みとならば南須賀村長樂寺眞言の住持方
 へ遣はすべしと答へぬ魯文思ふやう鋤鋤を握りて一生朽果つると我望みに非ず
 夫より長樂寺に赴かば住持に就て學問を爲すの便ありて我身に得る所少から
 ざるべしと思案を定め本家の世話にて翌日長樂寺に弟子入を爲し頭を圓めて日
 々經よむ事を習ひ居りしが是さへ好む所にあらねば後に經机に向ひて阿房墮
 落經の文句などを作る事に身を入れければ半年に満たざる中に住持の爲めに追
 出され又もや江戸にさまよひ出でけり夫より葭町の慶庵奉公人に就て奉公の世話受宿
 を頼み頭髮の五六分延びかゝりたる儘にて通油町の書肆藤岡屋慶次郎方の店番
 となりしが好む道とて賣物の合巻物を片端より繕きて餘念なく讀入り客の店頭
 に來りて直を聞くもあるも掛々しく返答せず折に並べたる小本などを盗ま
 るゝとあるも一向之に心付かず店番の職掌のいつも怠りがちなればアレで困
 るとの主人の小言さへ折々の鼓膜に響きぬ或時の事とか豫て知己なる柳下亭種
 員が草稿を携へて藤岡屋に來り主人と店先にて談話の折柄ト魯文を見てイヤ

先生茲に居るかど聲掛けられ魯文の急に我身耻かしくなり其儘裏口より逃出し
て再び藤岡屋に歸らず其夜の或る旅人宿に一泊せしに同宿せし武藏屋良助と云
ふ者魯文に向ひ見受ける處にていお前も定まる職業もなき容子なるがナント私
と一所に故郷なる上總の新堀今の市原郡市西村へ行て見なさらぬか田舎の事とて氣樂に暮
される道も有うからと勸められ別に活計の考へもなき折柄とて魯文の二も
なく承諾し翌日大雨を冒して良助と共に旅立せしに良助の一文無し魯文の僅か
に二三十文の小遣を所持せしばかりなれば駕籠に乗るともならず二人濡風の如
くなりて漸く新堀に辿り着りしに良助の家へ昔し豪農なりしも今零落して
家財何一つなく燻ふりし大きな家に老母ひとり淋しげに留守を爲し居りし始
末なれば是で一日も此家に厄介に成り難しと魯文大に失望せしを良助の早く
も見て取りナニ心配するに及ばぬ私の妹婿で長我部の幸藏といふ處で名を
得たる博徒の親分株なれば是に頼んでお前の身の振方を附けて遣ふとて其日魯
文を幸藏に紹介せり幸藏の魯文の顔をつくつく見て商家で育つた人にして人
品あり丁度好い使ひ所があるとして獨り笑を含みたる体に魯文少しく怖氣だち先

づ幸藏の顔を見るに眼鏡く骨達しく何さま一癖あるべき人物其傍らに坐したる
乾兒にハ刀疵の残りしもあり黔の見ゆるもありて我身の宛がら山賊に捕へられ
しが如き思ひにて心も心ならず其内幸藏の魯文に向ひナント今宵から武士に化
けて賭博場へ往つてい呉れまいかナニ大小の手扱むばかりで人を斬るに及ば
ぬ唯だ何處までも武士の積りで威張つて居さへすれば濟む事じやと頼みぬ當時博徒仲間
の習慣として其親分株ハ必ず一二人の浪人を養ひ賭博場へ連れ行きて張番をさすの例あり是れ一にハ
親分の威權を示し又一にハ争論等を起して人を害せし時にハ無禮を働きし故斬捨てたりと其浪人に言はせ
なりとぞ否と言はく殺しもすべき權幕に魯文の是非なく承諾して髪を大髻に結直
し怪しげなる木綿の紋付を着し腰に大小をたばさみて其夜より二三度も賭博場
に臨みしが或夜上州の悪徒ども幸藏の賭博場に踏込みて喧嘩を仕掛け盆箆を
くり金錢を掴み出す等亂暴至らざるなく雙方血を流して闘ひければ偽武士の魯
文の膽をつぶし大小を谷へ投棄てし儘宙を飛んで新堀の良助方へ逃げ歸りモウ
くあんな怖い處にハ片時も居られぬ畢竟お前が口車に載せて此片田舎へ連出
したればこそ斯る憂目も見らぬ道理なれば世話序に何處を奉公口を捜して貰ひた
しと頼みしに良助も氣の毒に思ひ上總の九十九里に大野と云ふ知己あれば是に

頼んで見んとて翌日良助の魯文を伴ひ三日が、りにて大野を尋ね求めたれど其居處さだかならず僅かに木賃宿に雨露を凌ぎ四日目の明け方茫然として新堀村に歸り來りしを良助の老母見て機嫌わるく母子の者が食ひ兼る中より他人の世話に數日を費し母を饑渴に迫らするとの親切も程こそあれとて涙まじりの愚痴をこぼすに良助も當惑し夫ならば今より復た江戸に出で何か商賣に有附かんとて急に我樂多物を賣拂ひて之を老母の小遣錢に渡し又同家の床板の楓の如輪木理なれば江戸へ持行き賣拂は、よき直に買ふ者もあらんとて其板を外して魯文に脊負はせ二人とも再び新堀を發して江戸に向ひしに孱弱なる小男が生れて初めて斯る重きものを脊負はせられし事とて魯文の歩行拙取らず途中五井ノ原といふ處へ來掛りし時の遙かに良助に後れて其影を見失ひ且脊中の楓板のだん／＼重くなりて骨も碎くるばかりなりしが終に板を脊負ひたる儘途上に倒れて氣絶せり時過ぎて通り掛りし馬士の爲めに呼び活けられ其板を馬に附け辛うじて五井の河岸まで辿り着き良助に逢ひたれども同人も錢なければ魯文の今まで締め居たる小倉の帯を五百文に賣拂ひて駄賃を濟ませ徒歩江戸に來りて以前馴

染なる木挽町の木賃宿松川屋に泊りしが江戸にも思はしき儲け口なく手を拱きて二三日を送るうち當時將軍家慶下野國日光へ御社參ありて同所の非常の賑ひなりと聞き日光へ行き何か仕事に有附かんと又もや良助同道にて同地に赴き鉢石の米屋といふ旅店へ一文なしにて投宿せり主人出で、御商賣の何ぞと聞きければ魯文の狂歌師千種庵諸持の門人にて斜月窓諸兄魯文の實際かか名乗りし事あり名を見る事ありと云ふ者なりと答へしに主人の風流の志ざしあるものにや去らば如何なる譯にて此日光へ來られしぞ其意味を狂歌に詠みて賜はるべしとて短冊一枚を出しければ魯文取敢へず

笹原のすねに針持つ 唾落の日光までもはしり大黒

斜月窓諸兄

と書きて與へぬ、主人其言葉の飾りなきを悦び實に狂歌師のかく磊落にありたきものなりとて太く魯文の氣風に感せし容子なりしが夫より江戸より狂歌師が來りたりと近所を觸れ廻りしかば色紙短冊なを携へ來りて揮毫を乞ふ者日々二人あり魯文茲ぞと氣を觸まし出たらめの即吟を書き散して與ふるに謝禮なりとて多少の錢を置き歸る者もありしかば先づ二人の宿料にハ事を缺かず去れど

長居しての暇を搔くとあらんを恐れ其助に別れて日光を立出で鹿沼まで來りし時江戸八丁堀の香具師虎屋倉吉と同宿して懇意になり打違立ちて江戸に歸り魯文の下谷簀輪町なる馬屋某の家に寄留し倉吉の爲めに糊附本の戯作即ち「亞米利加口説ヤンレ節」「質屋雜談融通軍記」「佐倉總吾一代記」など云へる卑しき文を草して與へしに淺薄にして拙劣なるもの却て世の好みに投じ倉吉も爲めに利を得ると少からず魯文の名も亦漸く世に廣まるやうになりしかば一二月の後ち人形町の書肆傍ら番附繪草紙等を出版す品川屋久助より合巻物の注文を受くるやうになりけり是れ魯文が廿三四の時即ち嘉永四五年の事なり

やまと新聞載る所の魯文翁小傳に曰く一年將軍家慶公日光御社參の時翁の花簪を出商ひの爲め日光に到りしに偶々病ひに罹りて心地死ぬべかりしを僥倖にして健康に復せしかど囊中に一物なく殆ど困却の折柄同じ木賃宿に居たる八丁堀の倉吉といふ瓦版師あり(瓦版といふ我邦新聞紙の鼻祖とも云ふべく當時の出來事を瓦に彫り之を印行して賣歩行くを業とせしものなり)翁の困難を見兼ねて救助せしかば翁も其報酬として瓦版の原稿に筆を取りしに素より文才

に富みし事とて倉吉の翁の爲めに意外の利益ありしを徳とし歸府の時翁の倉吉と共に八丁堀に來り倉吉の食客となりて益々瓦版の原稿に筆を取れり彼の世帯平記、雅樂多合戦など稱ふるの翁が當時の作なり其頃鈴木主水のヤンレ節てふもの流行し大工殺しなど云ふヤンレ節にも筆を採られしが翁の若かりし時常磐津節を學びて美音なり然れば讀賣輩も翁に鞠むるに洒落に讀賣たらんとを以てせしに翁も血氣定まらざる頃なれば時として我面白にヤンレ節の讀賣に出られし事あり其頃の著作に編笠大道軒の名あり當時の讀賣てふもの編笠を被りて立ちたればなり去れど黄金いかに長く砂中に埋まり居るべき幾程もなく品川屋久助といふ書肆翁の文才あるを見抜きて翁を瓦版社會より引揚げたり云々此記事は前項と附や異なる所あり

虎屋倉吉、品川屋久助兩人の意外の利益を得たれば嘉永六年の夏兩人醜金して翁の爲めに湯島妻戀町なる一軒の小家を買取りて之に翁を住はせぬ其家の間口九尺二間、奥行二間半、表の間三疊敷の疊あれど裏の方根太板の儘にて之に處をだらに薄縁を敷きあり唯だ家不相應に立派なりしに表の格子戸と二階物置へあが

る大階子の二つにて格子戸の葎町の藝妓鈴木屋お秀の拂ひ物を二分にて買ひ階子の或る料理屋にて用ひしものを引取りたるなり謂は、猫の額にも比すべき小家ながら魯文の既に一軒の主人となり且品川屋久助、糸屋庄兵衛其他書肆の需に應じて絶えず切附本を立案するやうになりしかば今の一廉の江戸作者と成り濟ませし氣にて一枚の槻板を買來り淺草並木の正木龍眠の弟子龍昇の豫て懇意の中なれば同人に頼みて其板に

談笑諷諫 御詠案文認所 江戸作者 鈍亭 魯文

と認めさせて之を門口に掲げ又家を野狐庵と號し同年の冬狐の皮にて作りたる袖無し羽織を着て机に對ひ専ら戯作に従事せり彼の「小栗一代記」「白井權八一代記」など云へる類の切附本の多く此年に作りしと云ふ

翌る安政元年妻戀下に住む旗下酒井新三郎の妾某の妹にて名をおよしといふを媒介する者あるに任せ娶りて妻となせり是れ長男熊太郎の實母なり當時の作料の引札の文一枚作りて二朱貫へば上等の部なれど出來星の作者なればと自ら卑下して魯文の一朱を以て其定額とし又切付本五十丁内挿畫十丁其下畫も皆の潤筆料の金二分と定めた

り固より價ひ低廉なれば俄かの夫婦暮しに世帯兎角足らぬ勝ちなれど其頃切付本大に流行し其作者の魯文に限るやう書林仲間には吹聴せられしかば幸ひ馬喰町の森治其他の書肆より續々注文を受けて相應の收入あり去れど魯文の少しも之を貯へず錢あれば花街に至りて之を散じ錢なき時のみ机に對して商賣に取掛る有様なればいつも木綿布子に三尺帯を締め窮々として蝦蟇のうめくが如く貧々として馬の嘶くが如し

翌二年十月二日の夜寒さ殊に強し是夜一冊の讀切本を脱稿したれば魯文の之を通り二丁目の書肆系屋庄兵衛方へ妻よしに持たせ遣りしが聽て作料二分を受取り歸りしにぞ内一分を地代の滞りに拂ひ残り一分にて米を買ひ妻の井戸端にて米を洗ひ魯文のよこれ蒲團を纏ひ寝ながら本を讀み居たるに突然百雷の轟くが如き響きと共に地震大に起りスワといふ間もあらせず彼の家不相應なる大階子の壁土もろとも魯文の寐たる上に落來りてヒシと魯文を敷付けたる妻の周章て駈來り力まかせに階子を持上げ魯文の漸く這出したるが幸ひ蒲團を着て居たりしと壁土に埋められしこの爲め身に怪我も無かりしかば夫婦とも戸外に這出

して一夜を明しぬ、斯る時にも素早さの際物師の常とて翌早朝一人の書肆來り何ぞ地震の趣向にて一枚摺の原稿を書いて貰ひたしと頼みければ魯文の露店にて立ながら筆を取りて鯨の老松といへる趣向を附け折よく來合せたる畫師狂齋後々姓川鍋洞都通に魯文下畫の儘を描かせて賣出せしに此錦繪大評判となりて賣れると數千枚、他の書肆よりも續いて種々の注文ありて魯文の五六日の間地震當込み錦繪の草稿を書くも二三十枚に及び皆賣口よくして鯨の爲めに思はぬ潤ひを得たりと云ふ、左に掲ぐるものも亦當時魯文翁の作りし戯文の一なり其繪の七代目團十郎柿の素袍大太刀にて足下に鯨坊主を踏まへ要石にて其首を押へ附けし形にして歌川豊國の筆なり

雨に困り野 ぢゆく 志ばらくのそと寐

市中三疊自作

東醫南蠻骨接外料。日々發行地震出火の其間に。怪我を爲さる者あらんや。數限りなき仲の町。先づ吉原がする市川。つぶれし家の荒事に。忽ち火事に大太刀の。強く當りし地震の筋隈。日本づゝみのあれ先と。轉びつ起きつけ烏帽子。さやつくと騒ぐ猿若町。芝居の焼ける去歲と二度。かさね鶴菱また灰を。柿の素袍のい

づれも様など早いじや御座りませぬか。實に今度の大變の嘘じや御座らぬ本所深川。話しのつき地芝山の手。丸の内から小川町。見渡す焼場の赤ッ面。太刀下ならぬ梁下に。再び敷かれぬ其爲めに罷りつん出た某の。鹿島太神宮の身内にて磐石太郎いしすゑ。けふ手初めに鯨をば要石にて押へし上。五重の塔の九輪のおるか。一厘たりとも動かさぬ。誰だと思ふア、つがも。内證の立退き藝者のかん酒。焼けた潰れた其中で。色の世界の繁昌の。動かぬ御代のおん恵み。ありが太鼓に鉦の音。たえぬ二日の大施餓鬼。ホ、つらなつて坊主。

又此年安政見聞誌三冊を出版す二世一筆庵英壽と魯文二人の合著なりしが公儀の許可を得ずして出版せし利にて版元と英壽との手錠となりし魯文の著名せざりし爲めに其罪を免がれたり、刑滿ちて後ち英壽來り見聞誌のお前が九分まで筆を取り私ハホンの手助けを爲せし迄なるに名を著はせしばかりで此災難に遭ひたりとて愚痴をこぼし夫にかこつけて屢々無心に來りたれと固より常に一朱の時へもなき魯文なれば是にいはとく困り果てたりとぞ

魯文ハ其家に貯へなきを結句竊盜の入るべき氣遣ひなしと言ひて表戸を引寄

せし儘夫婦とも外出すると屢々なり、或日の夕刻魯文ふらりと我家へ歸りしに家の内に襦袢、足袋、犢鼻褌の類取散らしありて何となく怪し氣なれば先づ箆筒の抽斗を引出し見るにたつた一枚の着換へ烟となりて行方知れず若しや竊盜が這入りしかと思ひて猶ほよく見るに箆筒の環は結付けある紙に「錠前をわけて言はれぬ譯ゆゑにあひ鍵の手のなは免せかし、萬穀亭積丸」と記しあるを見出し儲の積丸め遊びの金に詰り己の着換へを持出したなト言ひし儘其後氣にも留めずして打過せせしとか、此積丸の姓篠田後ち二代目笠亭仙果と改め明治初年「月とヌッポンチ」と題せし滑稽雑誌を著はせし人なり、又當時別けて魯文と懇意にせしハ琴亭文彦川原氏後ち岡丈紀と號し又風來山人全亭富藏なるか、前記積丸の三人なりしが其内二人ハ既に故人となり全亭富藏なるか子のみ今神田に住せり

安政四年の春魯文ハ「操松月景清」といふ三冊物の草雙紙を著し口繪さし繪とも一惠齋芳幾筆にて吳服町の書肆榎屋茂吉方より出版す、魯文是まで著はせし戯作多かりしも皆切附本と稱する印刷紙質とも粗惡なる冊子のみなりしに此書ハ彫刻精巧、製本も亦美を盡したれば世評隨つて宜しきのみならず魯文も亦初めて繪舞

臺に上りたる心地なりと言ひて喜びしとなん、又翌五年九月長男熊太郎産る此時二世岳亭定岡下谷廣小路の里長岡部助左衛門といふ者出産の祝ひにとて火消壺へ金百疋今の二五錢を入れ贈りしに物に頓着せぬ魯文も是にハ少しく眉を蹙め此倅も長生ハせまじと嘆息せしが後年火消壺の歎ハのがれしも長男ハ果して早世なりき

長男熊太郎ハ成長の後ち父と共にかな讀、いは、今日の各新聞社に入り編輯長に署名せしが後ち故ありて小笠原島に赴き明治十九年病に罹り父に先だちて同島に歿せり魯文翁此時「さかさまを見るも浮世か水の月」の句あり又其追悼の句を編みて「月の輪」と題する冊子を配れり

魯文妻戀に在る間ハ半バ遊興に日を送りしが如くなるも廣く雜書をあさりて社會の沿革、人情の變遷等を研究せしハ亦此時の事なり去れば何處へ行くにも必ず一二冊の書籍を懐中し妙樓に登りて廻し部屋などに入れらる、時にハ小暗さ行燈の下にて其書を繙き興に乗じてハ聲を上げて朗讀する事もありしかば此時より既に奇人の名廓内に高かりしと云ふ、斯くて萬延元年の三月先師花笠文京病歿す此時文京ハ太く零落し弟子筋なる瓢々亭千成名古屋の人が深川佃の辻番所を守り居

14
29



三十四



三十五

りしを便り同所に寄宿中病ひを發せし事なれば死去の後も差當り之を葬るべき道なかりしが魯文の斯くと聞きて佃の千成方に至り茲へ來合せたる京鶴、仲九共に子の弟と相談し先づ早桶を買來りて死屍を納め京鶴仲九に之を擔はせ魯文の柔弱非力の身なれば早桶に附添ひて寺町の菩提所なる某寺に赴きて埋葬方を頼みしに年來盆墓の附届けもなく墓地も無縁に屬したれば埋葬の承引き難し何れへなりとも葬られよと寺僧一向に取合はねば三人の困じ果て此上の茶毘場にて火葬となし其遺骨のみを墓地の隅へなりとも埋め貫はんと魯文の鬼泉堂に打捨てありし白張の提燈に火を點して先に立ち仲九、京鶴の後より早桶をさし擔ひ又もや寺を出で、南葛飾郡逆井の邊りなる茶毘所をさして赴く途中京鶴の小溝に足を沁らして水中に轉び落ち早桶を投出すに周圍をからげし繩ちぎれ蠟燭の火も消えんとせしかば孰れも忙慌ふためき漸くにして繩を故の如く結び締め三人とも雨あがりの泥まみれとなりて茶毘所に至り火葬を託して歸りし翌日の丑の刻今の頃なりしが夫より二日を経て京鶴ひとり茶毘所に至り遺骨を拾ひ歸りて之を魯文の菩提所なる谷中の永久寺に葬りたり

萬延元年の夏魯文翁の友人數名と共に富士に登山し又箱根七湯を巡り道中あらゆる滑稽を盡せしが江戸に歸りし後ち(文久年間)同行者の滑稽失策等を材料とし「滑稽富士詣」十巻を著はして大に喝采を博し魯文の名益々世に高くなり巻中の人物の皆種々の變名を用ひたれども皆是れ同行者の實地に演じ來りし諧謔滑稽を其儘に寫し出せしものなれば巧まざる處に自然の妙ありとて一時の殆ど一丸の膝栗毛と併べ稱せられしと云ふ

文久年間初代柳亭種彦作の「正本製」といへる合巻物大に世に行はる、其三編「當歳積雪白標紙」一名顔見の挿畫に歌川國貞後ち豊國が赤本入道假名書といふ餘坊主を當時の名題下俳優阪東三津右衛門の似顔にて描きし事あり、一日魯文翁笠亭仙果二代稱せし人を淺草堀田原の宅に訪ひし時仙果の此「正本製」を取出して魯文翁に示し赤本入道の顔が魯文に生寫なりとて手を拍ちて笑ひぬ、當時魯文翁の故ありて剃髮し其頭髮の一二分ばかり延びかゝりし處なと我ながら能くも其繪に似たりと思ひし程なりしかば折能く同家へ來合せし梅素玄魚と相談し今より假名垣と改名せんと云ひしに二人とも夫れ然るべしと立どころに同意し仙果の祝ひの歌まゐ

らせんとて「をさな子の摘むこと草をゆひ込めて筆のたくみも見ゆるかな垣」と詠
じけれバ玄魚も亦取敢ず「皇國文字なががきと書く筆架のやまと心を磨かざらめ
や」と詠み棄てしとなん、是れ魯文が鈍亭の號を改めて假名垣と名乗りし所以なり
初代種彦の「正本製」初編の文化十二年出版、爾來年々一二冊づゝ引續き發兌し其
の三編の文政の初年梓に上せしものなり、去れば魯文翁が之を見たるを文久の
初めとすれば同書發兌の時より四十餘年後の事なり、但し此年まで魯文翁の「正
本製」を見ざるに非ず唯だ仙果に赤本入道の繪を示され初めて我顔に似たる
を心附きしなるべし

其頃また惡摺といふもの大に作者仲間流行す、此惡摺といふの友人の不品行又
の失策話し等を粗書に顯はし之を瓦版に付して印行し普く其人の知己又ハ得意
先に配り以て其非行を諷刺するの意に出でしものなるが後にハ此惡戲ハ誹毀一
方に傾き一家の秘事も摘發して痛く人身攻撃を加ふるやうになりぬ、魯文ハ此
惡摺に筆を採ると屢々にして當時一枚の惡摺出れば又魯文の惡戲ならんと言は
れし程なり、又此惡摺の流行ハ明治初年までも打續き慶應年間に「鳴久者評判記」

の出版を見るに至れり其内惡摺の立役として魯文ハ足立座、染谷座、白縫座皆惡摺
の版元
三座かけ持に其名を著はし魯文の作りし癩陀羅經梅素玄魚の意氣事を阿房羅萬八番乘
組興諸角力勝負地獄變相し罪を責むる狂畫等ハ皆大上々吉の部に加へられ後にハ此惡
摺だんくくと大袈裟になり終に邪魔妬魂など云へる彩色入奉書上彫刻、上印刷の
惡摺を配るやうになりぬ

やまと新聞所載魯文翁の小傳に曰ふ文久年間の頃惡摺といふ不風流の遊びが
専ら風流社會に行はれ魯文翁ハ此惡摺に筆を採るを好みぬ或時興畫合せの
開卷序を洗湯に見立てたる事あり正面柘榴口の華表ハ赤毛氈を以てしつらへ
畫のある處ハ是真翁の筆になる風呂先屏風にして衣類を入れるべき戸柵文庫を
設け此中に小袖、羽織、帶、襦袢等思ひくゝの景品を入れ置く趣向にて羽目に寄席
の財牌數種あり其中へ翁ハ獄屋政談叩きばなし井双庵大笑といふヒラを作り
て貼りたり此大笑といふ人ハ相馬家土屋家などの爲換用達を勤むる松塚
某といふ豪家の主人なりしが放蕩をし盡て若隱居の身となりフト博奕場ばくちばに遊
び居りて手當となり五十敲きの處刑を受けたる事あり出獄の後ち剃髮して僧

となり傍ら雜俳の點など爲し居りし人なれば魯文翁が叩きばなしの趣向のよ
く欲りて大受けなりき然るに大笑の以ての外憤はり斯る惡戯の洒落の外にし
て意恨ある者の所爲に出たるなりトウデ一度臭い飯を食ひし體なれば此上の
魯文を殺して自首せんと臺所の出刃庖刀を懐中して其家を去り只管魯文の歸
途を窺ふもの、如し人ありて之を翁に告げたるに翁も初め眞事とせず魯文
の體に骨があるなど、威張り居りしも出刃庖刀が見えぬと臺所の訴へに其
事實たるを知り素より臆病の翁ひふるひ上り歸途の船にせんか寧ろ爰に泊ら
んか大笑若し一泊せしを知りて謀殺に來らば如何のせんか戦き居りしに其後
ち大笑の跡を追ひて仲裁を爲す者あり翁も平あやまりに詫び叩きばなしのヒ
ラを剥がすと云ふを趣意に事濟みとなりたり

此惡摺若し明治の今日に行はるれば忽ち秘密出版に問はれ又ハ誹毀罪に陥りて
永續すべきものに非ざるも當時さる法律の設けなきのみならず作者畫工の皆匿
名なりしを以て仲間内に非されハ容易に作者の誰たるを知るを得ず爲に其取締
りも自ら緩漫なりしなるべし去れと偶々作者の誰たるを露顯する時の誹謗され

たる當人の作者に蘆談して版木を取毀たせ又ハ證文を取りて罪を謝せしむる事
などもありしなり左に掲ぐる証文の如きハ其一例なり

御詫申上候一札の事

一銀座稻荷云々

一清濁くらべ

右我版内輪にこしらへ各先生御立腹の段恐入候全く老耄心得違ひ申譯も無之
候右版木さし上げ涉ゆらめん被下難有奉存候依て爲後日証書如件

丑九月十九日

二代目 柳亭種彦 印

一惠齋芳幾先生

山閑人交來先生

山々亭有人先生

かな垣魯文先生

魯文翁の外に好んで惡摺を作りし者ハ山々亭有人條野二代目柳亭種彦初號笠亭仙果梅素
玄魚、武田交來、一惠齋芳幾、飾葛醉櫻軒高野出揚扇夫等の諸氏にて殊に盛衰競、南子
の馬鹿など云へる惡摺ハ大に文人社會を騾がせしのみならず是に就て奇談頗る
多けとれ傳記の餘事に涉るを以て茲にハ略せり、又文久二年の春魯文ハ妻戀町よ

り日本橋龜井町へ移轉せしが同年七月妻よし麻疹に罹りて死亡せり

龜井町へ移轉せし當時の事とか妻戀の地主が地代の延滞を催促に來りし時妻の熊童子長男 熊太郎を脊負ひし儘挨拶に出でたるに魯文の二階より手を振りて留守だと云へど手眞似にて教へしを見て童子の何の氣も附かず阿父さん妻戀の叔父さんがお出だそんなに手などを振らずに下りてお出でと云ひければ妻のハッ顔赤らめ挨拶に口籠りしが地主の氣を利かせイヤお留守か又來ませうと立歸りぬ、此日の流石の魯文翁も腋の下より冷汗を流せしが大に地主の慈愛に感じ八方算段を爲して翌日地代の延滞を皆濟せしと云ふ

又此年の春翁の淺草門跡添地の梅を觀んとて友人芳幾、玄魚、扇夫等に誘引はれて我家を出でしが他の三人の皆新しき白足袋を穿ち魯文のみ汚れて鼠色となりしものを履き居たれば魯文の途中大道にて犢鼻褌の切れ端などにて足袋を仕立て賣り居る者あるを見附け三人を待たせ置ながら往來にて我が汚れ足袋を脱ぎて足袋屋の下に取らせ其内新らしさうなるを買取りてはき換へ是でよしと連立ちて梅林に入りしが其足袋の永く大道の砂はこりに塗れ居りし事と

て猶ほ他の三人の足袋と較ぶれば黄ばみて見にくかりければ魯文翁これを氣にして「白足袋のよこれ目立つや梅の花」と吟みし由

其頃また三題噺の催し流行せり、是の文化の昔し元祖三笑亭可樂が一分線香三題ばなしと名け下谷廣徳寺前なる孔雀長屋に演じて當時大評判を取りしを思ひ出し柳島の金座役人高野某俳名花兄又醉櫻 軒とも號せりが之を再興せんものと假名垣魯文、山々亭有人、河竹新七後ち黙阿彌と改む綾岡輝松、梅素玄魚、落合芳幾、武田交來、福井扇夫、瀬川如阜の諸氏、黒人の三遊亭圓朝、柳亭左樂、春風亭柳枝等と謀り其仲間を粹興連と名づけ文久二年の秋日本橋萬町の柏木亭に高座を設け知己朋友及び其家族等を聴衆となし各々三つの兼題を結びて一席の落語に綴り高座にて講演せしが人氣これに集ひて忽ち市中の評判となり翌年の大傳馬町の豪商勝田某俳名春の屋幾久別に興笑連なるものを組立て兩國の柳屋樓上を以て定席とせしにぞ夫より後の粹興、興笑の兩連の昔噺の昔といふ字に因みて毎月廿一日交るゝ同會を催せしに終に江戸一種の流行物となり其流行に連れて三題扇子、蒔繪三題櫛、三題張煙管、銘酒三題ばなし、三題菓子、三題染浴衣、三題模様半襟などを賣出す者多く又後に粹興奇人傳

馬喰町二丁三題噺評判記上同春色三題噺春の屋著作など云へる書籍の出版を見るに至れり魯文の毎會出席して三題噺を演せしが翁の音聲低き上に抑揚なく且話しの脚色のいづも錯雑して明瞭ならず中に随分無理附會の趣向もありて上評を得るに至らず初め魯文が話しをするに聞きあの人頼才ならば定めて趣向も面白く且滑稽をも交へて人を笑はせるならんと樂みし者もありしに其話しの意外に眞面目なりしかば筆と口とのあやにも違ふものかと失望せし聽衆もありしとぞ是に引替へ毎會大喝采を博せし河竹新七後ち古河 黙阿彌にて氏の噺の脚色に無理もなく且音聲も爽かにして黒人も及ばぬ妙處ありしと云ふ後年高座にて演せし三題噺を其儘狂言に仕組みて舞臺に掛け大評判を取りし事あり彼の和國橋の藤次、斗々屋の茶碗のどゞき是れなり

魯文作「劇場繁昌記」中の一節に左の記事あり曰く文久三年正月七日粹興連長高野氏の早春の發會を興笑連より先にせんと噺初の相談かた／＼有人、芳幾、魯文を誘ひ當時茅場町の居宅より常に出入する茶道の宗匠村田宗伯をも伴ひて五人鎧の渡場より豫て仕立てし家根舟に同船しつゝ、東兩國の割烹店青柳樓の棧

橋に舟を繋ぎ同樓にうち登りて其頃柳橋の流行藝妓二名を聘し半日の酒宴に談話を交へ宗伯の其夜七種の茶の湯ありとて一步先に席を辭し殘る四人の夜に入りてイザ歸らんと樓を下り棧橋に繋ぎたる彼の家根舟に乗移れば藝妓樓婢の陸より送り左様ならば御機嫌ようど紋切形の棄セリッをキツカケに漕出す船の舳を向けて兩國の橋間に近よる折もあれ橋と舟との險しき間へ上よりドンブリ水烟そりや身投よと船頭の聲に船中四人の吃驚し高野氏の此時はやく船頭身投なら助ける／＼と呼はりぬ船頭は斯くと見るより突出す棹に舳を返せば橋に近づく舟の舳に一没一浮ブ／＼と浮出したる死骸の襟先手をさし延べて芳幾が其半身を引揚ぐるに魯文も是を手傳ひて彼の腕首を引捉へ臍氣ながら提燈の火影にひとしく死相を見やるに年頃五十前後の男毬栗頭髪の身に着けたる衣服の單衣か袷か夜目にいつれと分らねど上に纏ひし黒色のひとへ羽織の空蟬のもぬけの殻の水浸し襟首より刺繡の少しく見えしを察するに當時幕府の茶道家杯かやくき隠居のあまされ者が瘡毒などを病はうけ身体不隨の處より一家親族にの見放され便る方なく入水せしものかとも想像せ

られぬ此時船頭のいへるやう此死骸既に橋杭にて鼻柱を強く打ち氣脈全く絶えたれば引揚ぐるとも其甲斐なし若し引揚げて蘇生せずば情が仇の關係にて多少の難儀は且那方御一同のみならず我々も亦免がれ難し疾々放して水葬禮と促し立てられ高野氏も同船の芳幾魯文も遺憾ながら船頭のいふに任せて南無阿彌陀佛の聲もろと手に手を放せば開のあやなし川下へ流れし果の如何なりしや、船頭は此時體を早めて間部河岸より行徳河岸を横ぎりて鎧の渡場に舟を留め此棧橋より高野、有人、芳幾、魯文の打連れて茅場町へと歸りたり、同年同月十一日に有人、芳幾の兩子が當春例の三題ばなしの發會兼題配りとして淺草寺内寐釋迦堂今の馬道二丁の奥地なる河竹其水子阿彌翁に至るをり彼の身投一件を物語りしが其水子の得たる兼題は「斗々屋の茶碗」「山笑ひ」「居合抜き」の三題なるより直ちに連中の囃高き兩國の身投話しを種子としその時魯文芳幾が引揚げし坊主の脊中に刺繡ありしと茶道家ならんとの鑑定を其儘斗々屋の茶碗に趣向を持込み同月廿一日の發會に旨く三題に纏めて話されしが此趣向新なり奇なり且實傳に近しとて連外の評判年を追ふて高く爲めに河竹に乞ひて

彼の噺を狂言に仕組まば如何と勸むる者多きより遂に維新の後ち明治三年猿若町三丁目守田座狂言二番目に此舊作の三題噺を新案に取仕組み名題は即ち「時鳥水響音」役人替名の花垣七三郎に澤村訥升後ち助高船頭の久太に中村仲藏、下男友藏に市川左團次、七三郎妹お露に尾上多賀之丞、手代與兵衛實のまむしの次郎吉に尾上菊五郎等なりし、演劇中の役名に花垣七三郎とあるは粹興連長高野氏の雅號を花兄と云ひ別號を櫻垣と呼びしに因み七三郎は七五三丸の狂號ありしに依てなり又其時中村鴈八後ち鶴藏の役名茶の宗匠東伯とありしは村田宗伯が宴席に一座せしを船中の人數に加へたる働さなり云々

文久三年の春出版せし「粹興奇人傳」に「此三題噺に出席せし人々の小傳、肖像、自詠の歌等を載せ又自作の三題噺をも附記せり其内魯文翁の小傳と同翁の作りし三題噺とを左に掲ぐ

魯文ははじめ鈍亭と號して花笠文京秘藏の門たり其かみ富家に仕へて丁稚たりし時或人相して此子僧長く商家に在るべきものならず文に遊ば、世に名を揚げんと言はれしが果して幾程もなく主家を退身し路通が昔ならねども處定

めぬ旅路にさまよひ其外種々の艱難して終に妻戀に居を設けてより次第に賣名す元と是れ幼少より商家に仕へ半途にして大に窮し物學ふいとまわらずと雖もそも十八九歳の頃より作道に志ざし深くまだ兼吉と呼びし頃より著述の書あり好こそ物へ上手の理り今戯作者中の才子なり

○水滸傳

大女 涼み舟

假名垣魯文作

宋孔といへる通客、替間の都林中、講談師燕青などを伴ひ暑さを水の滸に避けんと柳橋より舟を泛べあちこちと漕廻るに頃しも五月二十八日川開きの夜の事にして揚げる煙火の星降り、百八の數に滿ち各々佳興に入る折しも橋間に繫ぐ家形の舳先に身の丈ばつくんに勝れし女立出で、涼み居たるにこなたの人々これを見て「コウ、見さつしアノ家形舟に立てゐる女のがうざに脊が高いじやアねへか、ありやア何處の化物だ」林「モシ旦那あれを御存じなしかへ今度横濱から來た肉饅頭の小さんといふ藝者さ」宋「ハ、アあれが名代の大女だノ脊の高さはいくら有らう七尺のたつぶりだせ」林「なに七尺でさくものか八九尺の

へ宋「さうでねへ小三女だから一丈せいだらう

當時魯文翁の戲號の下に善惡の印を捺す事あり或人其の出處を尋ねしに翁の答へて是れ善玉と惡玉とを合して余の性質を表せしものなり余の性元來感情に強く例へば人の薄命にして落魄するを見る時已れの貧苦を嘗め來りしに思ひ較べて力の及ぶ限り之を救助する事あり然れども若し其人にして他日余に不快の感を與ふるの舉動ありとせんか立どころに前日の厚意を棄て、飽までも其人を攻撃し陰に陽に復讐的の念を晴さんとするの氣風あり之を要するに余の愛憎共に動すれば極端に走り易く忽ち善となり忽ち惡となると掌を反すが如し是れ此印章を用ふる所以なりと物語りし事あり晩年に及びて翁の性質大に變じて只管無事を樂しむの風ありしも猶ほ時として情實に制せられて昔しの氣質を顯はす事もありき又此印章の明治十二年頃門人伊東橋塘に譲與せり

やまと新聞所載魯文翁の小傳に曰く、文久年間魯文翁の千住の貸座敷大黒屋の遊女おのぶに馴染みて雨の夜風の日の嫌ひなく通ひ詰め遂におのぶと同棲を忍び出で翁の寓居に逃げ込みたり此時興盡合といふ事流行し河竹新七氏の芝

居の演初しざうの趣向しゆうかうにて連中の穴を穿ち役名として其巻を讀みたる時翁の役名やくめいの左の如し

白石街道大千寺の住職鈍亭和尚實まことの大黒屋おほくろやのふの情夫假名垣谷五郎然るにおのの逃亡たうぼうの事が面倒めんどうになり先方より厳しく取戻しの談判だんぱんに來りしも翁おきなの身を償ついでふ金かねのなしおのふの元もとの主人へ歸さるゝならん死ぬと云ふおのに翁おきなの困却こんかくの餘り或人に計りたるに其頃下谷廣小路に石井大之進と云ふ居合拔あひぬきあり水戸出生の者にて身幹拔群たけぼくぐんの男なりしが一日いかめしく大小を横たへて千住の大黒屋に赴おもむき拙者ちやくしやの水府の浪人なるが當家へ出稼でかせぎの遊女あそびめのふの拙者ちやくしやが姉の娘にて則ち姪めいなり拙者ちやくしやの國を去りて五六年を経過けいこしたれば姉の動靜も知らざりしに此頃のふの突然拙者の寓居ぐきよへ參り遊女となりたる不幸を話し素より病身にて憂うれき勤こめもなり難がたければ苦海くかいを抜き吳よとの頼たのみなれど赤貧せきひん洗あらふが如ごとき拙者ちやくしやに手てで彼が身受しんじやうけを爲し得らるべき然れども茲いまが相談さうだんなり永とこき年賦ねんふにて償ついでふべければおのふの證文しやうもんを卷まいて拙者ちやくしやに呉くれる譯わけにおの參らずやと脇わきを張りて掛合かひひけり當時水戸の浪人といへば人々恐怖きようふの念を抱かかり折柄せりがらな

りしかば大黒屋の主人も諺ことわざにいふ犬糞いぬくその譬たとを恐れたかが遊女一人なり死んだと思へば夫それでなれば寧いつを證文しやうもんを卷まいて遣つた方が宜よろからんと思案しあんを定めたる折せしも大黒屋の娘が何心なにこころなく其處そこへ來り大之進の顔を見やうて不審ふしんの体なりしが漸しく思おもひ當りしものゝ如ごとく父を小蔭こかげに招まきたり此小娘こむすめの十一二歳の頃より下谷廣小路の手習てな師し匠じやう匠じやう惠泉堂の内弟子うちでしとなり居りて此頃實家じつけへ歸りしものなれば廣小路に居る頃大之進が居合あひぬの業を度々見て其面おもて体ていの能あたり知れども立派りつぱなる武士ぶし出立ちに氣を吞のまれて疾はやに思おもひ出さゞりしが漸しく夫れと思ひ出して斯ごとくと父に告げたるなり是こゝに於おいて主人しゆじんの再び大之進の前に出で來り手前の娘むすめの久しく廣小路の惠泉堂へ内弟子うちでしに遣はし置きしが御自分様を度々お見受け申したりと告げければ大之進おほいの素もとより惡人でも何でもなく所講しよかう義俠ぎけつ心こゝろより事の茲いまに及びたる理由りゆうなれば良心りやうしんに太おく耻かぢぢ掛合かひあひもそこゝにして逃るが如ごとく立歸りしおの飛とんだお茶番ちやばんなりき此時翁おきなの神田久衛門町に居りて彼の博阿彌はくあみ佐々木ささき老人らうじんの其大屋おほやたりしかば店子たんでしの子なり子の爲ために盡つす何の不可ふかあらんと白石街道大千寺建立こんりふとして八方やうぱうに義捐ぎけんを募り其頃二十餘兩といふ金を懸かけ

め再び大黒屋へ掛合ひて奇麗に妓籍を抜き目出たく結婚の式を擧げたり此夜
弊社の採菊前號山人の夜鷹蕎麥一荷を總仕舞にして進物にせしに來客の一同大
受けなりしが花嫁の少しく不滿の顔色なりしと
魯文翁が龜井町より久右衛門町へ轉居せし文久二年の冬か翌年の春の事なり
しと覺ゆ當時佐々木博阿彌老人の借家に住ひて其の店子たりし者の山々亭有人
假名垣魯文、請談師寶井琴凌今の琴凌の父なりの三人なりしか前記白石街道云々の奇談の
採菊翁實見の話しなるべし、又魯文翁が久右衛門町へ移轉せし當時一奇話あり、初
め翁が其借家を見に來りし時家主博阿彌に向ひ疊、襖の古きを我慢すべきも障子
だけい是非とも新しく張替へて貰ひたしと約束して歸りたり家主の之を聞き戲
作者といふしなべて道樂者にてかゝる事に頓着すまじと思ひ居りしに魯文の
奇麗好きの不思議なりとて言はる、儘に表の障子を皆な新らしと張替へ置きし
に魯文轉居の後ち偶々外出せんとする時其留守中に尋ね來べき人々への用事
の悉く此障子へ書附けて他出するを例とせり譬へば種彦に用談ある時種彦來
たならば之を見よと前書して「今夜行く筈であつたが行かれぬ」と認め置くなり留

守中種彦來りて之を讀み同人も筆を染めて又其障子へ「夫で困る明朝の屹度來
れ」など書置きて歸り後に借金の日延べをも此障子へ認め置くやうになりしか
ば二三ヶ月を経ざる間に障子紙の草紙の如く眞ッ黒になりたり家主博阿彌之を
見て憐れ一杯魯文に徹られたか是で半切を買ふて遣つた方が餘程ましであつ
たと眩ししとぞ
當時三題嘶に次いで流行せし興書合せといふ遊戯なり、此遊びの先づ會日を定
め其前に兼題を配り置きて當日其趣向を持寄り衆議判にて之が優劣を定め高點
の部への夫々賞品を配るといふ方法なり其興書の認め方兼題の品物を書中
にあらはさず故事又の古歌等の意を取り他の景物を描き出して夫となく兼題を
利かする趣向にて例へば寄月水といふ兼題の出たる時、薄の原と富士の遠見の
みを書きて武藏野と見せ月と迷水とを隠して夫となく兼題を利かせ又養在深閨
人未識といふ詩の句を兼題に取りし時、室咲の梅を描きて餘意を示すがことさ
趣向なり魯文も亦此遊び仲間に加はり時々興書を出品せしが是の三題嘶の下手
際なりしに引換へ毎度高點を取りて喝采を博せし事あり或時江戸市中の橋名を

分ちて兼題とし花水橋といふ題を取りし時翁ハ鶯と蛙とを短冊に書きて持出し
 ぬ是ハ彼の古今集の序に花に啼く鶯水にすむ蛙云々といふに因み夫となく花と
 水とを利かせたる趣向にて一座大受けなりしが此催しも亦年を追ふて盛大とな
 り慶應年間にハ或人の追善の爲め「隈なき影」といふ興書合連中の影書と自咏の句
 とを記せし美麗なる彩色摺の大冊子を配るやうになりぬ、茲に掲げしハ即ち魯文
 翁の影法師にて同書中に又左の如き小傳を載せたり

筆頭の疾きと風來を欺き狂文に走れると三馬の才も遅かるべし著述の稗史愛
 瓶を得ざるハ無くふツつけ書の引札滑稽至らぬ隈も無ければ虚名を一時に高
 うせり唯癖として一日花街にいたらねば寐食をよくせねと強ち京傳の昔を忍
 ぶものにあらず思ふに此子西村主が志を繼いで花街漫録の後編を輯めんと
 腹稿あれバ夫等の故ならんかし

魯文翁ハ久右衛門町より轉居すると二回、慶應年間にハ淺草寺地内寐釋迦堂俗に長
 屋とに住せり當時福地源一郎氏も亦同所に寓し福地鬼外と號して翁と共に戯作
 に筆を取り且屢々相携へて吉原に遊び皆連數日に涉りし事もありき、後ち翁ハ再

水うき寺灯の

まじり

花乳歌

るる



花うき寺
 花うき寺
 花うき寺

ひ淺草諏訪町へ移轉せり

慶應三年「細撰記」と題して江戸市中の商業者飲食店等を吉原細見記の体裁に綴りて出版せし爲め翁の版元と共に獄屋へ下されし事あり其頃かゝる出版物の書物問屋中に行事といふ者ありて出版の書籍への都て行事より検印を附するの慣例なりしに彼の細撰の無改めにて出版せしに付行事より告發せられ遂に其罪に座したるものなり素より輕罪なれば間もなく出獄せしに當時銀座役人に辻傳右衛門といふ人あり淺草橋場の別荘に於て興盡合せの開卷を催し是日の來會者の旅人の装ひすべし旨の通知ありて皆思ひ／＼の服裝を爲したる中に翁の出獄間も無ければとて胡魔の蠅に扮立ちたる事あり然るに四五日經て後ち大傳馬町に假名を春廻屋某田といふ豪商ありて翁を川崎在平間村の厄神へ代參に赴かしめたる事あり是れ厄神の社宇修繕の事ありて春廻屋氏の其寄附の大旦那たりしかば修繕落成を告げしとて同社より招待を得たれば翁を代參に立たしめたるなり其日厄神の宮の江戸より參詣の者も多く畫工の國周山々亭有人なども俱に誘はれて同社へ參詣し其夜の祠内へ參籠する者多かり

き、然るに參籠の信者中に「は組の消防夫にて外道の吉といふ者あり性正直にしてつまり愚直といふ方なるが時しも秋の央にして夜長の頃なれば雜談の種も稍や盡きたる折ふし翁の紙入より一個の骨子を取り出して外道吉に向ひ頭領にシ轉がしでも仕ませうかと戯れに言ひたるが愚直なる吉の其骨子を手に取り見るに俗にいかさまと稱ふる不正の具なれば吉の其骨子を翁の膝へ投返し物をも言はず其座を立ち別當に向ひてあれ何處の者ぞと問たるに彼こそ傳馬町様の代參にて假名垣といふ有名の先生なりと答へけり吉の翌日江戸へ歸りて直ちに春廻屋を問ひ旦那の假名垣といふ奴と如何いふ御關係かと問ひたるに春廻屋の曰くどうと云ふ事もないが罪のない面白い男だ先達て辻の別荘で胡魔の蠅になつたが正眞の胡魔の蠅の様だつたよ」云うでせう胡魔の蠅々らゐの仕兼ねへ奴だ夫れに無頓着な男だから細撰を書いて少しばかり牢へ這入つた事もある「賽錢を盗んで牢へ行きやしたか何でもそんな刑状のある奴でせう俺に向つていかさま骨子などを出しやアがつてと頻りに立腹の体なりしも春廻屋の大家の旦那にしていかさま骨子の何たるを知らざれば此應答の聾話し

にて雙方一向に通せずかゝる處へ有人子尋ね來りて此談話を聞き抱腹して雙方を辨明せしかば春廼屋も外道吉も果の大笑ひとなりしとぞ
翁の寐釋迦堂に寓せし頃前にも言へる如く新吉原に遊ぶこと概ね虚日なく殆ど妓樓を以て我家と爲せし有様なりしも去りとて翁の色に耽るに非ず酒に溺るゝにも非ず數日間留連する時の如きは豈に必ず机に倚りて戯文を草し又花街の事情にして他日戯作の材料ともなるべき事柄の悉く之を手帳に筆記し置たりと云ふ福地源一郎氏の如きも亦妓樓に在りて幕府の爲めに翻譯を爲し一日にして數百圓を得たるなどの奇談あり後年娼妓評判記の著ありし蓋し此時より胚胎せしなるべし

慶應三年三月廿四日翁の先師花笠魯介追福の爲め淺草御麻河岸昇月樓に於て書畫の大集會を催せしに來會者一千餘名にして頗る盛會なりと(是年後妻のふ淺草諏訪町に病歿す)又明治二年九月翁の山々亭有人子と謀り淺草寺境内人丸堂の傍らに埋もれありし故山東京傳の古机の碑を再興せんとて兩國柳橋萬八樓上に書畫の筵を開きしに此會の收入意外に少くして建碑の資を得るに至らざりしかば二年を経たる後ち其碑を掘起して周圍に柵を設け僅かに素志を果すを得たりと、

翌三年翁の娼妓評判記の著あり然れども此書の僅かに二百部を限りて印刷し其餘の故ありて絶版となりたれば世に傳はるもの太だ罕なり、同書初編に翁が福棹魯吉と變名し當時大に行はれたる福澤諭吉氏の「世界國畫」に倣ひて作りたる苦界文畫の其文頗る面白ければ左に掲ぐ

苦界ふみ盡し

魂膽

契應妓熟 福棹 魯吉 著

苦界の憂し間夫客の多しといへど大凡そ五ツに分けし町目、揚屋角京新町と。西と東の江戸町に境かざりて阿茶屋洲。大全盛へ別にまた皆呼出しの名稱なり。歌妓の風俗新造も禿かざれば氣が變る。その華麗を知らざれば。意氣な人たる甲斐もなし。迷ひて得べき廓なれば。紋日に遊ぶ壯夫へ。茶屋の案内の裏馴染。先づお手とりて穴端を。記すところの

阿茶屋洲

二六時中の通ひ路の客の先にも客ありて。登樓れば歸る廓の道。田町の果の際限なき大音寺前土堤の下。お茶屋衆のせはしなき。唯一懷を始めとして妓樓の方へ

と送り出す。其筋々を尋ねるに、華奢の阿茶屋の一大客。人品もよく諸事盡く。服装も吟じ着たの羅紗。茶屋しゆの沙汰のいらいらん買ひ。人をおだて、滅法徳。常住無心の長艶書より。茶羅の日増しの定使ひ。文賃わづかに三百文。女郎さんの文なれば。商家も暇を費やして。抜けて通ふも間々にあり。無闇にあがる香公の居残り料の剥がれ品。暇にお茶挽くその中に。傍輩繁昌土地賑ひ。とう／＼一夜の身揚りなり。そも吉原の物語り。むかし庄司の時代より。年を経ること二百歳。仁義五常を疎んじて。人情うすき風なれど。其名も高尾の君さまが。文面書いた郭公。通客次第に衰へて夜具をこさへす。妓を身受けす。我より外に情人なしと。せげん知らずの高床。遊君ばれの意にまかせ。女郎を泣かせし。悪体の。權幕のがる、所なく。縋縋の勘當十二月。梵天國と身を落し。唯一錢も貯へず。詫事願へど負債の。正金一千二百兩。五町の茶屋を借盡し。猶も借りたる無理の我意。曲げてまた借りまた曲げて。今の姿となりゆきし。其有様ぞあはれなる(以下略す)

同六年の冬翁の横濱元辨天に移轉す(當時野崎文藏の名を履し假名垣魯文を以て通稱とす)時の神奈川縣令大江卓氏の民情を視察するに能く下情に通じたる者を

して縣下を巡回せしむるに如かずとし翁を擧げて神奈川縣の雇とす是に於てか昨日まで一ト口に戯作者と呼ばれし魯文翁も羽織袴に威嚴を粧ひ先づ教育の普及を計らん爲め縣下各部を巡回し時に村民を集めて遊説する事もありしが戸長等の翁の名刺を見るに及びて皆眉を蹙めざる無かりしと蓋し其名の奇異なるが爲めなり、一日巡回の途次或る驛の旅店に投宿し翁の湯殿にて汗を流し居たる時同じ浴槽中に在りし客の他の同伴者に向ひ「ナント今日巡回して来たお役人の珍らしい名でないか」アレが戯作者で有名な魯文といふ男よアレで教育の説諭も可笑しい大事な息子を皆放蕩者に仕上げるだらうト言畢つてフト魯文と顔見合せ忽ち顔を赤らめ周章ふためきて逃去りしかば魯文も流石に極り悪しく且其言のものを評し得て盡せるに感じ官吏となりて碌々日を送るに決して風流の志ざしにあらずとて幾ばくもなくして職を辭し又元の戯作者に立戻りて専ら西洋膝栗毛及び安愚樂銅等の著述に従事せり就中西洋膝栗毛の前記の富士詣の事とく魯文翁の實験談に非ずと雖も専ら福澤諭吉氏の西洋事情を骨子とし且當時歐米より歸朝したる富田砂筵子に就て外國の實況を問合せ其の地理人情等

岡丈紀子三世紙鳶の翻譯ほんやくに係るものを參酌さんしやくし之に自己の意匠いじやうを加へ例の才筆を揮ひし事なれば滑稽こつげい百出看る者其思想の天外より來れるもの多きを徴しるび今に至るまで之を愛讀あいどくする者絶えず魯文翁の名是が爲め益々世間に廣まり終に明治の一九三馬を以て翁を稱しょうするに至れり或云翁が神奈川縣廳の吏員となり或云翁が神奈川縣廳の吏員となり

明治六七年の頃魯文翁の横濱に興りたる横濱毎日新聞社に聘せられて雜報記者となり或云魯文翁は此時まで神奈川縣廳に出動せりと又居を同港櫻木町に轉せり、明治八年十一月翁の毎日新聞社を去り新たに假名讀新聞なるものを起し當時東京にて發行せし讀賣新聞主筆鈴木田正雄、平假名繪入新聞主筆高島盛泉と鼎立して其賣れ高を競へり、讀賣の眞面目にして親切、繪入の華麗にして愛嬌あり而して假名讀の洒落にして輕妙、各々其特色を異にせしを以て讀者も亦其好む處に就て之を愛讀し三社とも漸次盛大となりぬ、翌年魯文翁の横濱野毛山に屈くつ蟻ぎと稱する一茶亭を開き後妻おためと共に同所に轉居し茶を煮て客に侑まめ又自由に新聞紙を縱覽じゆうらんせしめ居りしが翌々十年假名讀の本社を東京々橋彌左衛門町に移すに及びて翁も亦家族と共に同社の奥座敷おくざしきに寓居ぐうきよせり

或夜翁の新橋の一酒樓にて宴會えんかいのありし際席上初めて金春の老妓若松屋鈴八と言葉を交へ翌日直ちに鈴八の家を訪ひし時翁の沓くつぬぎにある鏡かがみ櫃びん形の下駄箱を見附け強て之を鈴八より請ひ受け繩にてからげ脊負せせかひて我家へ歸りしが五六日過ぎて魯文翁の鈴八に文通して見すべきものあり一寸我家へ來りたゞへと言ひ送りしに鈴八の直ちに翁の家に赴き何心なく床の間の脇を見れば曩むかしに我方より持歸りし下駄箱の立派に塗替ぬかへられて佛壇となり居りしにぞ下駄箱變じて佛壇となりしを見しに今が初めてなりとて鈴八も手を拍ちて笑ひしとぞ

左文曰く是も當時の事なり余一日魯文翁に誘はれて淺草近傍を遊歩せし時翁の二王門内霞簀かさいの蔭にて紫螺むらの壺焼を賣り居る老翁ありしを見付け此句ひが鼻へ這入つて我慢がまんが出來ぬ足下も附合つきあひ給へとて其前に蹲ちぢまりて頻りに壺焼を味ひしが翁の黒の紋付もんづきを着し余の洋服をまどひたればまさか立食たちくを爲すべき人柄ひとがらにあらす殊に是日の日曜の事とて綺羅きらを飾りし令嬢貴婦人などの來往らいつわ織るが如く中に二人を指さし一笑して過るもあり其頃余の年猶は若

く此附合に殆ど面目を失ひし事あり、翁の物に頓着せざる概ね此の如し
 幾ばくもなくして假名讀新聞の本社を出雲町の大通りに移し紙上へ猫々奇聞の
 一欄を設け翁の持前の才筆を揮ひて専ら藝妓のアラを穿ちしより學者書生も其
 文の輕妙にして自在なるを賞し先を争ふて之を愛讀し終に翁の別號を猫々道人
 と呼ぶに至れり或へ云ふ猫々道人の號へ成又同社の出雲町へ移轉せし日に料理屋
 或ハ商家などの店開きの如く入口に蒸籠、炭俵、酒樽等の積物を爲し之に數千枚の
 ビラを張出して大に景氣を添へたり今日より考ふれば新聞社にして積物を爲す
 が如きはまるまじき話しなれども當時ハ一人の之を批難する者なきのみならず
 却て其趣向の奇なるを賞せし程なりき左に假名讀の投書家中阪まとき子の筆に
 なれる假名讀新聞轉社の景況と云へる一文を掲げ以て其一斑を知らしむ
 詩曰。善戲謔兮不爲虐。太史公書有滑稽列傳。皆取于益於世者也。とハ柳子厚が毛
 穎傳を讀むの文ならずや假名讀の魯文翁に於ける魯文翁の猫に於ける亦然り
 其文を見れば滑稽戲謔其説を見れば奇々猫々茶々羅萬八、鬼も爲めに腹の皮を
 捻り神も亦お臍でお灸花而して其寓意に至てハ蓋取于益於世もの太史公も必

ず水盤大の判を捺して保證せんと必せり、されば天地間の動物中横目豎鼻の人
 間社會亞細亞東部の日本人種たる者誰か假名讀を讀んで一たびハ其滑稽戲謔
 に頤の掛がねを外し一たびハ其寓意に感じて反正せざる者あらんや是に於て
 お得意ハ刻一刻より殖之日一日より増す、初め横濱に二葉を生じ直ちに東京へ
 移し植ゑしより未だ一週年に満たざるに忽ち枝を垂れ葉を重ね終に堂々(オツ
 ト柳北先生既に言はれたり)于茲明治十一年二月一日を以て天の時と地の望に
 乗じ出雲町四番地の大煉瓦室へ整々然として轉社せり其景況の如き豈鈍筆の
 盡し得る所ならんや即ち左にひっかく所の九猫の一毛にも足らざるなり「本舞
 臺三間の間(オット表間口五間)總て元祿中に正氣を發したる忠臣藏の景況を模
 し得て山道だんだら筋の提燈數百張、鬼灯提燈も亦凡そ一萬許り團十郎、菊五郎
 勘彌、河竹諸子の贈れるいろは炭四十七俵ハ竹田出雲町假名で本社御中と記し
 たる趣向最も奇絶といふべきか眼睛を丸くして再び一轉眼すれば猫節數百樽
 累々として雲を凌ぎ宛も人扁東京有名のの開店かと怪しまる、許り積重ねたる
 ハ知らずニヤン人の贈物を、且見れば金春の猫十三名緋縮緬一反をわがねての

しの形と爲したるの他日魯翁が老を養ふの^{しにぎ}下衣と爲すの説あり豪も亦豪ならずや、又見る^{せいらう}聲弄(蒸籠)百荷重々として半天に聳ゆるを是れ亦其名も著る日本橋の大工町に錦花猫ありと知られたる金毛九尾の叶屋歌吉なり此他横濱猫連が猫の見立の扇面合せ數十繰て本社の前頭に陳列したる眼眩し晴惑ふ、道路の説に京橋松田の開店以來此の如き宏大なる見世開きを見ずと、然して同業社中の贈物の日報の猫節一連鈴付の猫の首輪にさしたる趣向を始めとして奇を戦はし妙を競ひ智を以て智を争ひ豪を以て豪に對す其數枚舉に遑あらず朝野、日就、報知、近事、風雅、續文社、七寶社其他何々山の如く岳の如く丘の如く陵の如し(以下略す)

同年魯文翁假名讀新聞編輯の傍ら別に「魯文珍報」と題する雑誌を編みて毎月一回發行す又同年七月中村樓に於て珍猫百覽會なるものを催せり是の翁が猫(藝妓の假稱)を筆誅するを展ふなれば其罪滅しの爲め猫塚なるものを淺草奥山に建設せんと企てあり既に碑文成嶋柳北翁撰さへ出來せしかば其費用を募らん爲め自家秘藏の猫に縁ある古器物古書畫を陳列し知己友人にも亦夫々出品を請ひ來會者をして

之を縦覽せしめ會費の剩餘を以て建碑の費に充てんとするの企てなりしなり去れば其目的の通常の書畫會に異ならざれども趣向の意表に出でたると魯文翁の交際廣きとの爲め來會者二千餘人の多きに及びさしもの中村樓も立錐の地なかりし程の盛況なりき左に久保田彦作氏の珍猫百覽會の記を掲ぐ

本日(七月廿一日)會場中村樓の門口に紙招牌へ珍猫百覽會云々と筆太に記載して縦覽の目標とし右の方芝山に在來の樹木をかたどり彼の猫塚の石猫を据付けたるの後日淺草公園花屋敷植六の庭中に建つると本日の開筵を併せたるの用途にして正面の玄關軒先の額面の新小判を以て造りたる珍猫百覽會の五大字額椽の緋鹿子の首玉に眞鍮の鈴を裝飾す、打違への旗の白地へ赤色にて會主が猫面の遊印を染出し數十の紅燈を掲げ樓上に會主縦覽の賓客を迎へ廣間の上座の清樂合奏者の一席とす此前面卓を置き大花瓶に秋草を挿み香爐の香の馥郁として席中に薰す、百覽會陳列場の一區の南の方廊下を隔てたる座敷數室にして入口より數間の間左右に排列す猫塚の碑銘の假に表裝して同廣間の床に掲げ會場縦覽の前後に此碑銘を第一部分とし順序に東の方の壁を隔て

たる一席を第二部分とし爰に本日開筵の爲めに當日有名の諸文人より寄贈せられたる書畫の幅を掲ぐ是より第三部分の入口に浴ひ右の方を書畫幅とし左の方を器物の陳列場とし第四第五と分ち而して出口の歸路に就かしむ、列品殆ど六百餘種出口の上に花簪の匾額を掲げ之を縦覽の婦女子に呈して餘興とす、午前八時三十分場中の陳列全く整ひ同九時より開場し午後八時閉場と定む、本會の周旋補助の新聞各社を初め萩原乙彦、大蘇芳年、立齋廣重、武田谷齋今の紅葉山人の父、松林伯圓、三遊亭圓朝、武藏屋猫七の諸氏にして清樂の合奏者の鶴原堂鳥屋氏の周旋にて音律整々たる合奏に衆客の心耳を澄まざしむ、詩文人の揮毫するや衆客擧つて唐紙扇面に其筆跡を乞ふ又清樂の洋々たる間彼の開化講談松林伯圓席の中央に進み恭々しく祝詞を朗讀す之につゞいて演説家の隊長堀龍太先生進んで猫々論を演説せり喝采の聲の拍手と共に滿場に響き渡れり、會主の舊知已たる梅素玄魚、河竹其水、瀬川如阜の三翁と共に會主の後見となりて此會の隆盛を補はれ六二連に砂筵、高筵、染谷、笠仙の諸氏勝川春亭、五姓田芳松、寫眞家の二見朝隈、北庭筑波、塙芳野、濱町の和田氏等二十八名且新聞投書家に爲永

春江、若菜貞爾、野崎左文、八木梅桂、結城光昭、風也坊、花廼舍由縁、松崎徳造、花川戸岩床、膝小僧、鎌の屋一農、賞楠堂鶴甫、伊藤文二郎、西村賢八郎、中阪まとき、道隆賤生、芙蓉堂の諸先生にして孰れも祝文の玉章を贈られたり、新富座の伊優連に尾上菊五郎、市川小團次其外門弟二三名を引連れ當日打出し後より縦覽に來りたり此日最も遺憾なりし午後九時頃大傳馬船に數人の樂人孰れも烏帽子素袍にて船先に「猫塚供養」と記した紅燈を掲げ棧橋に漕寄するるとき三絃鼓の調を正して供養塚といふ新曲を奏す此催し主の新富座狂言作者竹柴進三氏にして彼の樂人の同座の囃子方の連中なりしが時已に閉場後にして會員の外聞者無かりし惜むべし

又猫塚の碑銘(成島柳北撰、伊東桂州書)の左の如し

猫塚碑銘

生々於兩間之動物何限焉。其靈而神若麟鳳龜龍。聖人猶崇之。其美而妍若錦鷄白兔。金魚。人皆畜而愛之。今古一也。余友假名垣魯文翁。獨以愛猫稱。世人之相語。事若及猫則曰。告諸魯翁。有書畫器玩形于猫者則曰。贈諸魯翁。翁遂自號曰猫々道人。然翁

實非愛猫者。其所刊新聞紙。日錄猫之說話者何也。蓋猫獸之至柔媚者也。而世之清聲便體。欲猫皮而侍客者。其柔媚或有甚焉者。翁不拂他人之髻。以麝煤鼠尾糊口。其憎之不亦宜乎。今茲戊寅七月。翁語余曰。吾每叱猫鞭猫。而猫未嘗反噬。佛氏曰。狗子有佛性。猫亦或然乎。吾欲爲築一塚于淺草公園。以吊而祭焉。敢問祭猫禮乎。余對曰。禮也。郊特牲云。古之君子使之必報之。迎猫爲其食田鼠也。迎而祭之也。唐禮儀志亦云。祭五方之山林川澤。又祭五方之猫於菟及龍麟朱鳥白虎玄武。各用少牢一。然則猫之可祭也與四靈何擇。翁欣然。乃請余銘于其碑。銘曰。

宣尼泣麟

心豈在麟

猫兮猫兮

祭諸如神

魯翁有心

付度無人

明治十一年戊寅七月

柳北 成島 弘 撰

同年十一月魯文翁の故ありて假名讀新聞社を去り新たに兩國廣小路にいろは新聞を創立し翁の之が主筆たり社員に白石千別、逸文、京雜、賀柳香の諸氏あり又此年新富町七丁目新富座の横町へ佛骨庵なる草庵を新築し業務の餘暇佛像佛器其他の骨董類を購ひて之を愛玩し自ら玩佛居士と稱するに至れり

魯文翁の新聞社に在りて原稿を草するや筆を下すと頗る速かにして少しも思考を費さざるが如し傍らに人ありて翁と談話するも翁の之を厭ふ氣色もなく其應答を爲しながら猶ほ眼の原稿紙の上に注ぎ筆を走らすと少しも異なる事なし其出社中微醉を帯び又ハ睡魔に襲はる、時の起稿なかばにして右手に筆を握りながら翁の昏々として眠り時としてハ高駟をかくとあり傍人印刷の遅延するを恐れて翁をゆり起せば忽ち目を覺まし已に書終りたる前の文句をも復讀せずして直ちに其後を書續け之を植字方に付す印刷成りて後ち其文を見るに首尾聯串、毫も居限りの跡を留めず人之を稱して翁の一伎倆といふ此年より以後翁の其文を草するに當りて専ら漢語を用ふるを好み机を並べて座する者に向ひて屢々熟語を問ひ又ハ圓機活法等をくり廣げて對句を求めなどして一種の堅くるしき文を作るを喜べり然れども是ハ翁が流行に後れじとて無理に劃の多き字を用ふるに過ぎずして此文体ハ翁の長所にハ非ず寧ろ短所なりしかバ魯文も妙な文を書くやうになつた杯の批評を受くるに至れり若し翁にして依然其得意とする洒落本風の滑稽文を作り敢て時勢の如何に關

せざりしならんかゝる批評を受ざりしならんに翁の爲め惜むべき事なり
 明治十四年七月魯文翁の本所なる五百羅漢寺の爲めに遊戯菩提の法會を營みぬ
 是の翁がかゝる靈刹の頽廢に歸せん事を悲しむ世の善男善女に告げて淨財の喜
 捨を乞ひ以て同寺の保存を計らんとせしものにして當日施主魯文の五分刈の散
 髮に白帷子を着し黒絹の腰衣を纏ひて來賓に接し本堂なる會場に種々の古器
 物を陳列して客の縦覽に供へ又茶飯餚掛豆腐を發應し餘興として遊食會の催し
 あり遊食會といふものは此時より始まれり是日炎暑煨くがごとくなりしも來會者數百名にして頗る盛會
 なりしと云ふ

十四年の冬翁のいはは新聞社を退き翌十五年二月玄ん場の俠客子安米本と共に
 大阪を経て京都奈良に遊びしが大阪笠屋町なる俳優市川右團次方に逗留中過ち
 て同家より出火し丸焼となりたれば翁の着のみ着のまゝにて同家を遁がれ去り
 四五日在阪の後ち伊勢名古屋等を経て翌月下旬歸京せりと又翁が京都奈良漫遊
 中の例の古物癖にて骨董店の前をよぎる毎に古器物をあさりて購ひ求め或日の
 如き大きな阿彌陀の古佛像を脊中に負ひたる儘繁華なる京都市街を徘徊せ

しかば道ゆく人の皆ふり返りて翁を指さし笑はぬの無かりしとぞ

十七年六七月の頃小西義敬氏今日新聞なるものを京橋區彌左衛門町に興すに當
 り翁の入りて其主筆となり専らつゞき物の筆を取り社員に野崎左文清水米後ち同
 社が兩國村松岡に移轉せし時齋藤綠雨正太直子も亦入社して其編輯を助けぬ(此新
 聞の後ち改題して今の都新聞となりしなり)同十九年翁の同社を去りて東京繪入
 新聞後ち東西新に入社せしが此時翁の年已に五十八、殊に當年ひとり息子の熊太郎
 を失ひし爲め落膽する一方ならず日に新聞社の劇務に従ふの自ら堪ふる所に
 非ずとて潔よく同社を退きし後の新富町の寓居に閉籠りて靜かに老を養ひぬ、斯
 くて同廿三年三月翁の斷然文壇を退きたゞの親父となりて氣樂に浮世を送らん
 とて兩國中村樓に於て名納會なるものを催し年來貯へし古書畫書籍又名家の
 書翰短冊等を抽籤を以て來會者に頒ちぬ又此會に就て友人大槻如電子の廣條の
 ちらしへ翁に代りて左の如く記されたり

名納會口上

假名垣魯文の賤名の過る嘉永二年に「名聞顔赤本」と題せる小冊子を出版のをり

用ひたりしを其始めとすかくてより四十餘年戯作者となり新聞記者となり紙田筆耕この名を以て糊口の業を営みしが本卦還りも去年と過ぎ多雅とか也奇とか好き文字えらべ面白からんも其實ハ鷲馬に及ばぬ老動物せんさまおかはり俗に謂ゆる新陳代謝こゝらが此名のをさめ時としハ文明の花咲くてふ國會ひらくと聞くおいはれもまけし魂ひにハ黒界に偽隱の身とならまはしさも如何にせん死んですら地獄の沙汰況んやまだ息のあるをや因て年を好事に集め置し古器古書神佛混淆玉石瓦礫十把一からげ一山八文其點數を一千號に分ち抽籤法を以て賤名をかねて耳し給へる諸君におなごり申さん心なりこれぞこれ生き遺物とこそ申すべけれされば年俸八百圓の影をだに生き香奠のお手向あらんことを百拜稽首してねぎまをす假名垣の翁にかはりて筆とる者ハ

阿彌如電

是より先翁ハ渡邊義方子をして先師花笠文京の號を嗣しめしかば此名納會と共に翁ハ渡邊氏と共に故文京翁の紀念碑（京都府京都市川國十郎書を向島木母寺境内に建設し碑銘大概如電子撰）はにて師弟の義務をも果したりと飄然去つて京都大阪に遊び大阪にてハ共樂會

の催しあり七月上旬歸京せし後ハ僅かに筆を執りて一二雜誌に投書し又ハ請はる、まゝに情歌を選みなどして老後の樂みと爲し居りしが廿五年頃より腦充血症稍や重きを加へ翌廿六年古河默阿彌子の死去せし時の如きハ舊友の訃音に接してハ捨て置き難しとて病ひを推して會葬せし爲め途中に於て卒倒し漸く友人の助けを得て我家へ連れ歸られし程なりと云ふ此年より氣分よき日に「耄録」「蚯蚓遺跡」など云へる日記やらのものを記して樂しみ居りしに是すら後にハ手先ふるへて文字さだかならず殊に本年八九月の頃よりハとつと床に就きて枕も上らず藥石も亦其効を奏せずして終に十月八日午前九時六十六歳を一期として果敢なく黄泉の客となりぬ

翁の遺骸ハ同月十日其の菩提所なる谷中三崎町の永久寺に葬りしが會葬者ハ凡そ五百餘名の多きに及び近來稀に見る盛況なりき又翁が死亡せし當日其法號ハ何とんせな親戚一同額を集めて相談中孫の文三ハツト立ちて一枚の唐紙へ何やらん書きたる物を持出し是が祖父さんが地獄へ遊びに行く時の名だと言つて

私に話した事があるとして一同の前に差出しければ手に取上げて之を見るに曾て朝鮮の憂國家金玉均氏が翁の爲めに書したる佛骨庵獨魯草文の七字なり去らば之に居士の二字を加へて其戒名とすべしとて相談とみに一決せしが葬式の當日一同柩を送りて永久寺の墓地に到りし時圖らずも一個の石碑を見出し其碑面を見るに表に佛骨庵獨魯草文の七字、裏に遺言一切空、財産無一物の十字を勒し碑中に觀音の小像を刻み込みたるものなりき素より未亡人すら此事ありしを知らざりし程なれば施主の近傍の石工に就て其訛へ主を問合せしに是を二三年前魯文翁自ら來りて注文せしものなりと答へしかば偕に翁も其頃より長く生くべからざるを覺悟し家族にも知らせずして豫め此墓碑を作り置きしものならんとて一同其手廻しよきに驚きしと云ふ、嗚呼翁は是れ一世の奇才子、元と商家より出で、四十年來文筆に従事し戯作者として又新聞記者として名を兒童走卒にまで知られ一時の學者文人と併べ稱せらるゝに至れり而して其遠逝するや時の名士大家にして翁の柩を送る者亦數百人、生前の幸福死後の榮譽焉より大なるの無し、翁も亦必ず地下に瞑するなるべし

遺稿

魯文翁の遺稿として世に傳ふべきもの無し唯だ翁が病褥にありし時何くれとなく書あつめたる「蚯蚓遺跡」又「耄録」と題せる日記やうの備忘録あるのみなれど其記事の多く一家の秘密に涉れるものなれば茲に掲ぐるを得ず、又「耄録」中廿七年九月即ち翁の物故せし一ヶ月前の筆記に偶感と題して左の一節あり是れ翁の絶筆にして其心情の眞に憫むべきものあるに似たり、嗚呼人の將に死なんとするや其言ふと善しと、翁の數言亦以て世間浮薄人種の頂門の一針となすに足るべし

親戚同胞朋友も頼むべからず一身の外味方なし夫さへ故人の證歌に「幾たびかおもひ定めてかはらん頼むまじき心なりけり」甲者の昔し恵みを掛けし縁あり乙者の兄弟にひとしき交りありて庇護を加へしよしみあり斯かる時に逸散に馳せ來るべしなど心頼みの多く畫餅に屬するなり人情日に薄く金ある處に人心あつまり錢なき家に來者おのづから疎し澆季半間の人情皆かくのごとし密かに此事を記して世態の眞相を示す

又折にふれて魯文翁の詠じたる狂歌俳句の類頗る多しと雖も一も記録の存する

なきを以て悉く之を記載するに由なし茲に唯だ二三雜誌に載せたるもの又ハ
舊友の記憶せるものを掲ぐるのみ

○狂歌

安政年間妻戀下にありし頃狐の裘を貰ひ之を袖なし羽織に
仕立て、机に向ひしとき詠める

白たへを肌につきねの皮衣雪やこんくつまをひの里

題えらす

大海をえらぬ蛙も井のうちに居ながら詠める名所の歌

安政の末吉原湯屋町の出あひ茶屋阿波万治といへるに宿りて
茶屋女と枕を並べしに其女夜ふけておのれの財布衣類までも

盗みて逃去りければ裸体の儘枕元の行燈へかきつけゝる

思ひきや枕捜しに出合茶屋かゝる憂目にあは萬治とい

横濱福蝶蟻晩景

誰彼と答めん人も夏草のまげみを分けて風ぞとひぬる

蘆舟の達磨の軸を壁に懸けて

一物のおあしも無くてわたり舟本來空やくはす貧樂

けふいとして思ひ暮けりあすも亦今日いと思ひ入相の鐘

谷中團子阪葵園にて

螢澤さし入る水の路わけて空飛ぶ星もかげ見ゆるなり

天地大戲場 乾坤悉皆劇

去年ことし廻り舞臺の早替り入替り升土間のとみあひ

大晦日の夜に

掛取の鬼のこゝろや和らげん今日が三十一文字の夜半

六十一になりし年の初めに

見返れば危き雲の通ひ路や夢のうき橋わたり來し身ハ

偶感

點られしやいとの跡に思ひ出しいよくあつき父母の恩

六十四の年をむかへて

門松の曲りなりにも年越えて七九の竹もけふひと夜切

明治二十四と改まりて年の初めおのれハインフルエンザに
も罹らず夜毎に鍛冶橋外なるも、んちい屋に猪鹿の肉を味

ひて

流行の風さへひかて新しき世をふり出しの薬食ひしつ

五十三になりける年初めて東海道を下りて

五十路あまり三の宿りの下り阪杖つさ乃の字老の初旅

辭 世

快よく寐たら其儘おき巨燧いけし炭團の灰となるまで

○俳 句

簞笠の人にかをるや雪の梅

梅ヶ香や塀を覗いて鼻の墨

根岸の里にて

世にすねた住家や花に後向

草臥て鉄投出すや花のかけ
谷越ゆる蛙の舟や手斧くつ
丑年元旦
割箸の角やひらけて牛雜煮

明治廿四年元旦

若水に皺のばしけり車井戸

馬に灸すゑて夫から桃の花

猫の書かきたる扇に

長閑さや唐戸に響く鈴の音

蝴蝶園夫婦に枕二つ贈りて

花びらに羽も重ぬるや蝶二ツ

墨堤観櫻

壯士去つて又見直すや夕櫻

衆議院選舉

えらまる、程の譽れや年男

十五歳の時盃を被りて眼上に

疵を負ひし事を思ひ出して

川狩や盃をかぶるおく太郎

父家類焼して芝浦に移轉す

濱風や筥屋住みよき月明り

土佐日記を讀みて

貫之も濱に出て見よ松魚釣

十五歳の時初めて戯女を作る

砂原に蚯蚓のたくる暑さ哉

泥龜の釣針ひくや蓮のはな

出來星の大面目立つ涼み哉

松風に浪もはこぶや夏座敷

葎切ややつと出て來た渡守

本箱虫干

訪る、蠶魚の住家や八重葎

洋服を見るも暑氣や江戸祭

江戸三百年祭の日に

新聞を賣るも祭の時勢かな

京都三條に泊りて

加茂川に風はなすや夏泊り

香以居士の肖像を其角堂宗

匠より贈られしを見て

出し殻も匂ふや江戸の花鮠

京阪漫遊

老猫のうかれ歩行きや更衣

伊勢内宮

洗ふ手に小魚の寄るや若葉時

奈良

長き日や鼻つき合す佛たち

京都大佛

耳塚のうへに來て啼け郭公

東山

長閑さや足ふみのばす東山

北野

爰かよ浪花のうめの在所

東大寺

羽蟻立つ穴や仁王の尻こぶた

箱根湯本

水の音に覺て湯壺を思ひ鳥

琵琶湖

唐崎の松より濡れて春の雨

鹽原温泉道

雲に酔ふ山路へ遠し五月晴

左韮

昔きけ此掛はしのうつば草

鹽釜

藻の花の外に汐あり荷ひ桶

畑下戸

格湯や蛇さへ衣を脱ものを

○著書

魯文翁の著はせし書籍頗る多く就中一代記物と稱する糊付本の百餘部の多きに達せしも皆其の表題を詳かにせず茲に翁の著書中最も能く世にもて囃されしもの、みを掲ぐ

鹽の湯

山ひめも嚴のしほに梅積ん

瀧の湯

文覺も青葉がくれや瀧の音

安政見聞誌 三冊 操松月景清 三冊 金鈴善惡譚 三冊

薄緑娘白浪 五冊 朧月猫眼鬘 未詳數 春色巽八景 未詳數

東紫哇文庫 六冊 玉菊物語 未詳數 かなよみ八犬傳 廿八編下

黄標製戲作根元 未詳數 漢土手本唐人藏 三冊 鹽中天地一大戲場貧錢論 一冊

猿馬鹿三番相 二冊 浮世見物左衛門 三冊 太平氣樂舌卷物 三冊

狼狽舞足豆蔲 三冊 弓春張月廼夕榮 十七編より廿五編まで 雲龍九郎倫盜繪 七編より十五編まで

默陋落早指南	一冊	滑稽富士詣	廿五冊	西洋膝栗毛	十五冊
安愚樂鍋	一冊	胡瓜圖解	一冊	綱選記	一冊
浮世目鏡	一冊	世界都路	三冊	近世支那事情	七冊
子寶習字帖	一冊	西洋料理案内	一冊	佐賀電信錄	四冊
西南鎮靜錄	四冊	高橋夜刀譚	八冊	娼妓評判記	九冊
藝者之心得	一冊	百猫畫譜	一冊	遊戲菩提記	一冊

魯文珍報 卅五卷

以上の其重なるものを擧ぐるのみ又翁の引札ちらしの文を草するに巧みにして料理屋の開業、商家の賣出し等多く翁の筆を煩はし一時ハ魯文の名にあらざれば引札の價値なきが如き有様なりき、編者好んで翁の引札文を集め今家に藏するもの既に一千餘枚の多きに及べり去れば翁が戯作者となりしより以來本年まで草せし所の引札ハ殆ど一萬に達せしならん亦盛んなりと謂ふべし

弔詞

假名垣魯文氏の遠逝をかなしみて

入やすくさとり易くも書なしてふみの林を人に見せしを

福羽美靜

○

別れにし尾花か袖をおもひ草思ひにかわく露の間もなし
をさな子の昔語りに残るらんあはれいろはの假名垣の君
おのつから俳の骨と名をのこす人や戯作のゆるがどく尊

岩上亭和洲
千種庵春吉
小松園千壽

翁のむかし横濱毎日新聞社にありて茶説といへるを
ものせし時おのれも投書せし事なと思ひ出して

桃の屋鶴彦

思ひきや文に名けしこのめにて君か露にたむくへしとい
綴糸のきれしをしと忍はる、紀念となりしかな書の水
をしむかな垣に匂ひし翁草をもも待たで色のあせぬる
見盡してこたびハ死出の旅衣憂世を餘所に洒落たかな垣

面堂安久樂
彌生庵雞興
琴通舎富緒

赤本の繪にもか、れぬ哀しさに泣なから讀む假名書の文
をどめ等にやすく讀まする新聞の手本と成ぬ假名書の筆
なむあみた佛骨庵主この娑婆をあとに至樂の郷にいに是
筆とりて思ひ出しつ、歎かなかさうしとしも沈む悲さ
秋の屋望成
秋の本月磨
繪馬屋額輔
八十三翁
齡堂松壽

○

今はやむかし嘶となりけり灰にはなさくあか本入道
柱とも頼めしおちよ猫の爪かゝるへしと思はざりしに
いま早かたみとこそ成にけれ柱にのこす爪の文字摺
猫塚のいろは紅葉のちりぬるを我身ひとつの秋を悲しき
時めきて浮世をされしおい人もむかしとなりて残る猫塚
小川幻夢
我友野崎左文字こたみ假名垣翁追悼の巻をものして翁が生
前の知己に頌たる、との報あり余にも何かと申し越された
れバ例のえせ歌をかくなん
在高知
一筆庵可候
おのが名の佛の骨と身をなして舍利の光をのこす假名垣
杉葉亭又六
芦の本蟹丸
竹柴梅治
雜司谷丸猫

假名書のいろは空しく散ぬれと綴りし筆の跡そにはへる
君のいま蓮の臺に筆とりてこの世にしらぬ文つゝるらん
同 稻野年恒

魯文翁のみまかれしをいたみて
文といふ字の忘られず冬籠り
阿心庵永機

山櫻天狗の書いた女見せむと申されぬ余が始めて
翁にまみえたる時なりけらし

その歌の骨もひろはん冬木立
枯なりにゆられて寒き柳かな
其角堂機一
桂文舍萱洲
空也忌やほどけ造りし角細工
桂花園桂花
吹きやみし風や木立も時雨雲
寫松庵竹夫

翁と四十餘年の交はり今更おもへん
月花に遊ひしも夢の枯野かな
不白軒梅年
見馴染し假名と云字や眼に寒
春秋庵幹雄

懐しみ悲しみするのよつねの手向草おのれは翁が生前に書のかされし筆のあやを賞するのみ

今すでに水のかれしも名取川かな書のいろは紅葉や散ぬるを

老師のみまかれしを悼みて

影ふまぬあはれや霜の枯紫苑

遠くなる音のさびしや鉢叩き

ぬけ殻のぬくみ淋しき布團哉

残る香の垣根ゆかしを菊の花

濃く染た一本の早し散る紅葉

時雨るや手向の文字もにじみ勝

散ものにして惜まるゝ紅葉哉

秋なれや身にしむ風の夜半を吹

幸堂得知
かな井安全

蝴蝶園若菜

花笠文京

根本吐芳

神垣茂文

梅垣佳文

淺草釋迦六

戸崎文彦

河合寸州

散ぬればいろは紅葉も木の葉哉
惜みても是非なし風に夕落葉

竹柴瓢三
竹柴其水

余を彦坊くそのたまひし翁のむかし思ひ出られて

廊の灯の誰哉へふけて散る柳

勝 諺 藏

道人にわかれてさびし落葉山

三世河竹新七

その丈を影にゆづりつ枯尾花

尾上梅幸

枯れて後ち残す薫りや菊の花

中村芝翫

影うすき香のけふりや小春風

市川 翫 升

惜むほど散ゆく風の紅葉かな

市川 家 升

西へ行く別れを袖の時雨かな

市川 三 猿

花に來た野山も今日の時雨哉

市川 三 升

さめぬ程散をしまるゝ紅葉哉

三遊亭圓朝

池の蓮はすきよくも枯て仕舞けり
枯て水やる念もなし釣つりしのぶ
冬の日のはかなく入し端山はたけ哉
留主へ来て見れば眼鏡めがねと頭巾かぶと哉
枯れ蓮のまづかに暮て雨二日
筆とるもさびし硯すずりのしぐれ雲
留主るもになる庵いかりに聞くや霜の聲
二度咲さきの花や散行ちりゆくものながら
煤の眼まじのなみだ拭ふや古手紙

三遊亭圓生
三遊亭圓遊
立花屋圓喬
立花屋圓太郎
春風亭柳枝
禽語樓小さん
古今亭今輔
柳亭左樂
談洲樓燕枝

○ この一ひとまきをものすとて翁の書かきのこされしくさくさくの文ふみども
見はべりて

見ることに昔ゆかしと思ふかなおぼかき流したる水莖みづくきの跡

野崎左文

○聞き假名垣魯文翁游ゆ地獄ぢごく賦ふ此こ以も寄よス

玩球少年 市川大痴

假名垣なまがき翁おきな魯ろ文ぶん翁おきな文章起ぶんしょうおこ釜かま人ひと爲な茶ちや三馬さんば之後洒落手しやれつて一九以來滑稽家しやげきか
問と翁おきな少時習せうじしゆ何事なにこと唯云假名なまがき卅七さんじち字じ軍記物語信ぐんきものがたりしん手て緋ひ從よ是こゝ自よ壯さか者もの作つく
志こゝろ京傳馬琴きやうでんばしん雖なほ難がた臻いた一ひと九こゝろ三馬さんば可べ倣まね功こう又また累かさね歳とし身み作つく小こ説せつ以も
内うち人ひと翁おきな與よ余あま識し廿年にじふねん昔むかし狂くる文ぶん往むか々々驚おど人ひと魄たまし籠かご穴あな公こう乍しばしば上あ相あ匿かく室むろ猫ねこ
兒こ却かえ倒たふ履はき當あた時とき柳やなぎ仙せん鼻はな最た高たか内うち々々恐おそ掛か此こゝ翁おきな毫こゝろ皮かわ肉にく二ふた橋はし寐ね子こ曝さら從よ橫よこ
西にし洋やう膝ひざ栗くり毛もう翁おきな也なり及およ老おい爲な何なに計けい余あま在あ遠とほ國くに聞き不な細こま忽たち傳たづ近ちか企こゝろ地ぢ獄ごく廻まわ
佛ぶつ骨こつ庵あん中ちゆう含くは笑わら逝し生前ぜんぜん使つか捨す人ひと腹はら皮かわ死し後のち欲ほ解げ閻えん魔ま願ねが翁おきな稱なづ魯ろ文ぶん女に不な
魯ろ假名垣なまがき名な天下てんか下した知し

榎えの盆ぼん居い士し評ひやう 玩球わんきゆう爲な田でん舍しゃ廻まわ魯ろ翁おきな爲な地ぢ獄ごく廻まわ均ひら係けい誅しゆ鱧なま唇くちノの猫ねこ之の業わざ
此篇こゝ把と來き魯ろ翁おきな生な平へい縱たて說せつ横よこ說せつ筆ふで致いた宛あ轉まわ有あ球きゆう跳た干かん盤ばん上うへ之の妙たぎ不な負お
玩球わんきゆう之の子こ作つく但た子こ自よ稱なづ少せう年ねん一ひと柄がら於こゝ十餘年じゆじゆねん前まへ今いま年ねん果は幾い歲さい敢あ問と

かな反古をはり

(明治廿七年十二月脱税)

水子更吉(一)

(明治廿八年二月)

東京麻布區笹竹町六十五番地
著者 野崎城雄
同 京橋區新富町十一番地
發行者 假名垣文三
同 京橋區瀧山町十二番地今岡字吉方
印刷者 路次安太郎
同 京橋區瀧山町四番地
印刷所 東京朝日新聞社

明治廿八年二月 日出版
二月日 發行

非賣品

東京麻布區笹竹町六十五番地
著者 野崎城雄
同 京橋區新富町十一番地
發行者 假名垣文三
同 京橋區瀧山町十二番地今岡字吉方
印刷者 路次安太郎
同 京橋區瀧山町四番地
印刷所 東京朝日新聞社

同 二日 露行
即 廿八平二日 日出

東京編纂部

同 東京編纂部
東京編纂部

同 東京編纂部
東京編纂部

同 東京編纂部
東京編纂部

同 東京編纂部
東京編纂部